第8回

よこはま地域福祉フォーラム

報告書

誰もが自分らしく暮らせるまちへ

つながりが育む　お互い様の支えあい

社会福祉法人 横浜市社会福祉協議会
市内18区社会福祉協議会

はじめに

８回目の開催となる「よこはま地域福祉フォーラム」を、４年ぶりに人数の制限なく開催することができました。久しぶりに、地区社会福祉協議会、民生委員・児童委員をはじめとした地域活動に携わる多くの皆様にお集まりいただきました。寒い中、ご来場いただき、心から感謝申し上げます。

この３年間、地域の皆様、関係機関そして私たち社協職員も、顔を合わせる、ちょっと話をするといった、当たり前だと思ってきたことができないという悩みや葛藤とともに日々を過ごしてきました。コロナ禍を経て、改めて人と人とがつながることの大切さ、素晴らしさをどなたも実感されていることと思います。

そこで、今回の全体テーマは「誰もが自分らしく暮らせるまちへ　～つながりが育むお互い様の支えあい～」といたしました。基調講演では、フリースペースたまりば理事長の西野博之様より、子どもたちをとりまく厳しい実状や心あたたまるエピソードをお話しいただき、多くの方々から共感のメッセージをいただきました。

午後の分科会では、横浜の各地域で試行錯誤を重ねている住民同士の支えあいの取組を、コーディネーターの永田祐様、渡辺裕一様、地域の皆様、関係機関の皆様にご登壇いただき共有しました。

おかげさまで、今回も大変充実したフォーラムとなりました。

２月からの録画配信も含め、神奈川県内はもとより全国から1,100名を超える皆様にご参加、ご視聴いただきました。感謝申し上げるとともに、これだけ多くの方が、それぞれの地域でさまざまな課題に向き合い、皆の力を合わせて何とかしていこうと考えていることに、勇気づけられる思いです。

本報告書は、当日の基調講演と分科会の発表をまとめたものです。横浜の身近な地域のつながり・支えあいの取組が、日々地域活動に携わっている方々のヒントになり、活動を一層充実させる一助となれば幸いです。

横浜はもとより、日本各地の地域福祉関係者の皆様が、これからも生き生きとご活躍されることを願っております。

令和６年３月

社会福祉法人横浜市社会福祉協議会

会長　荒木田　百合

もくじ

●はじめに ……1

●写真で見る“よこはま地域福祉フォーラム” ……4

●基調講演 ……6

ともに育ち　ともに生きるまなざし

認定NPO法人 フリースペースたまりば 理事長

西野 博之 氏

●分科会概要 …… 14

◆分科会1 …… 16

思いに寄り添う　つながりのまち

～気にかけあい　そばにいる～

コーディネーター：同志社大学 社会学部社会福祉学科 教授

永田 祐 氏

（1）【緑区】鴨居こども食堂ぱくぱく

鴨居地区社会福祉協議会

鴨居地区民生委員児童委員協議会

鴨居地域ケアプラザ

緑区社会福祉協議会

（2）【旭区】市沢地区民生委員児童委員協議会

和＆輪（なごみあんどわ）

左近山地域ケアプラザ

旭区社会福祉協議会

◆分科会２ …… 25

垣根を越えて　地域に根差す　まちづくり
～連携（○○×□□）で育む～

コーディネーター：武蔵野大学 人間科学部社会福祉学科 教授
渡辺 裕一 氏

（１）【栄区】上郷西地区社会福祉協議会
SELP・杜
栄区社会福祉協議会

（２）【鶴見区】寺尾第二地区社会福祉協議会
馬場地域ケアプラザ

写真で見る

よこはま地域福祉フォーラム

2023（令和5）年 12月7日

誰もが自分らしく 暮らせるまちへ

～つながりが育む お互い様 の支えあい～

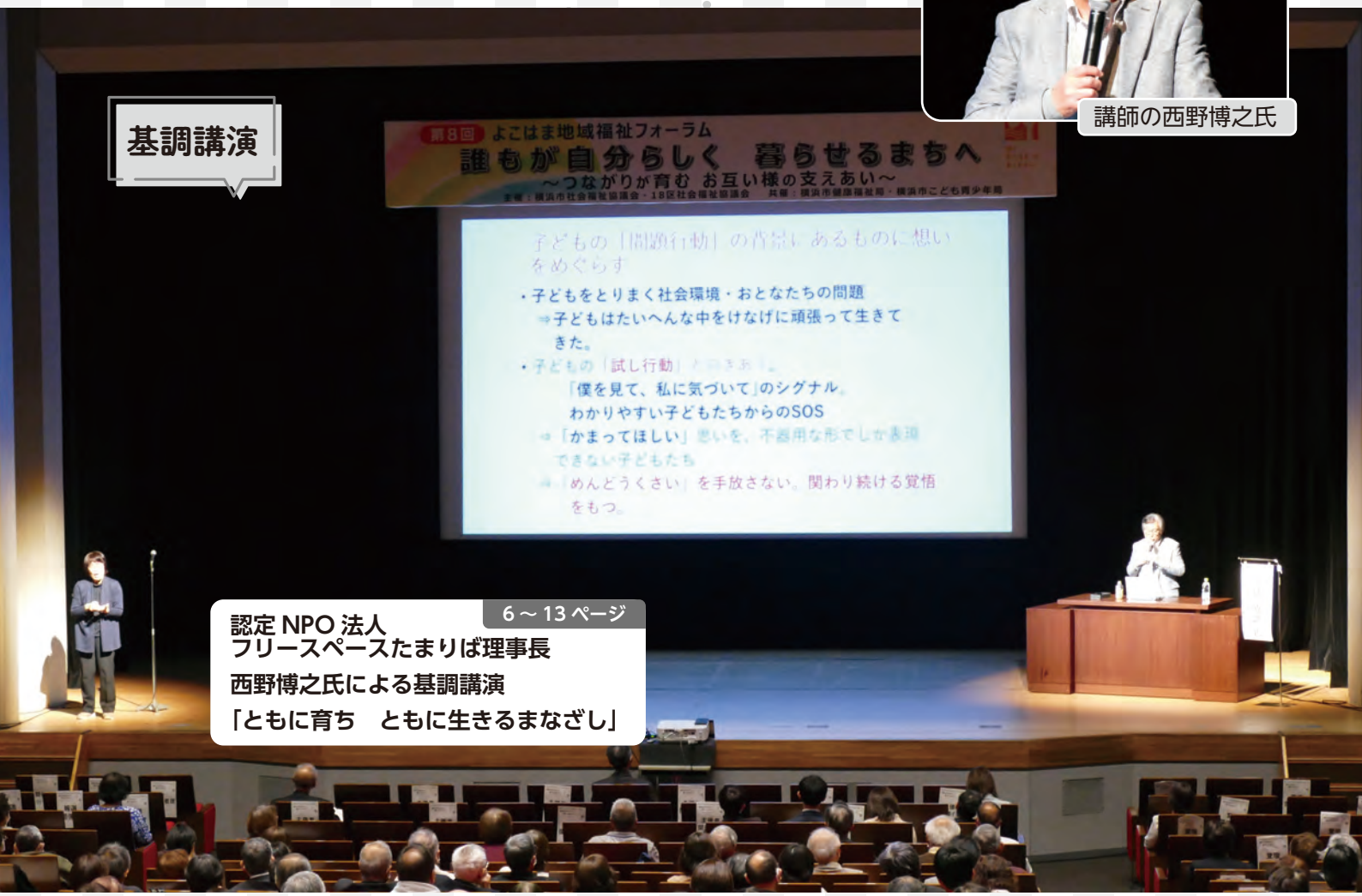
開会

荒木田会長の主催者挨拶

令和６年２月１日（木）
～３月26日（火）
動画配信

講師の西野博之氏

基調講演



認定 NPO 法人
フリースペースたまりば理事長
西野博之氏による基調講演
「ともに育ち　ともに生きるまなざし」

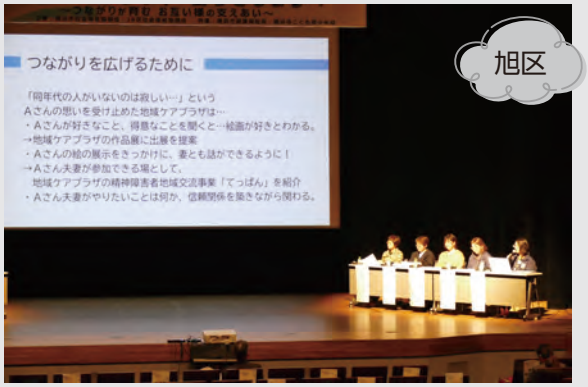
6～13ページ

分科会 1

関内ホール（大ホール）

思いに寄り添う　つながりのまち
～気にかけあい　そばにいる～

コーディネーターの永田 祐氏



16 ～ 24 ページ

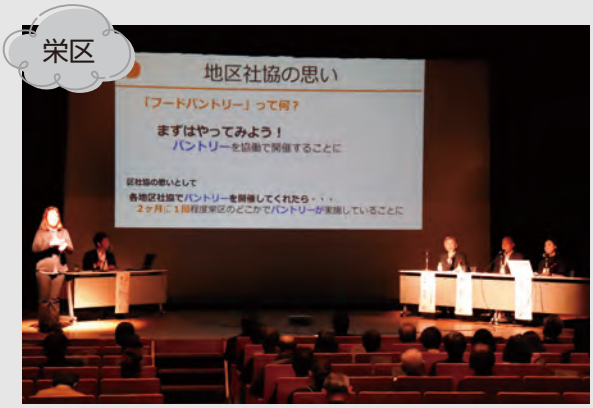
- こどもや家族のための居心地のよい場づくり
  ～食堂での交流を通じた地域での見守り～（緑区）
- 誰もが生きがいを持って暮らせる地域を目指して
  ～孤立を防ぐゆるやかなつながりづくり～（旭区）

分科会 2

関内ホール（小ホール）

垣根を越えて　地域に根差す　まちづくり
～連携（○○×□□）で育む～

コーディネーターの渡辺 裕一氏



25 ～ 34 ページ

- オール栄であたたかなつながりを
  ～食を通じた困りごと支援～（栄区）
- 子どもたちとともに育つ地域（まち）を目指して
  ～つながる、広がる、「はな♡そうカフェ」とともに～（鶴見区）

基調講演

ともに育ち　ともに生きるまなざし

認定NPO法人フリースペースたまりば
理事長　**西野　博之 氏**

ユニセフが先進 38 か国の子どもの幸福度調査を発表しました。日本の子どもは身体的健康度は 1 位ですが、精神的幸福度は 37 位です。なぜ日本の子どもたちはこんなに精神的幸福度が低いのでしょう。今日は「ともに育ち、ともに生きる」ということを一緒に考えていきたいと思います。

「夢パーク」が注目される背景

令和４年７月にできた「川崎市子ども夢パーク」を紹介する映画『ゆめパのじかん』が好評で、いろいろな自治体で上映されています。また、令和４年９月に放送されたNHKの『ドキュメント72時間“どろんこパーク”雨を走る子どもたち』は年間ベスト１に選ばれました。子どもたち、多くは不登校の子どもたちがどしゃぶりの雨のなか「夢パーク」で遊んでいる様子を紹介したものです。少し前であれば、おそらく「非常識だ！どしゃぶりの雨のなかで子どもを遊ばせて風邪をひかせたらどうする」という非難の声が多々あったと思うのですが、なぜか高い評価を受け、再放送されています。

なぜこんなに「夢パーク」が注目され、子どもの居場所が注目される時代になっているのか。居場所が必要な背景を、まずは共有したいと思います。

不登校は増え続けています。令和５ 年 10 月の 文部科学省発表によれば、不登校の小中学生は全国で29万9000人、公立中学生の17人に１人が不登校です。高校の不登校と高校の中退を合わせると10万人です。大変な数です。

いじめの現実

不登校の背景にあるいじめは決して少なくありません。いじめによって学校に行けなくなっている子どもはたくさんいます。９年間の義務教育のなかで、先生が気付いて教育委員会に報告して、文部科学省までデータが上がったいじめが一番多い学年は何年生だと思いますか？　小学校２年生です。意外でしょう？思春期など、もっと大きい学年だと思いませんでしたか。第２位は小学校３年生、第３位が小学校１年生です。つまり、わが国は、小１、小２、小３でいじめがピークを迎える社会なのです。不登校が減るわけがありません。人生最初の集団である幼稚園・保育園を経て、もっと大きな集団である小学校に上がった途端に待ち受けているいじめ。「学校は怖い」、「友だちがいじめられているのを見た」、そこから子どもたちの小学校生活が始まるのです。

いじめの認知件数は過去最多です。国が認めた数だけで68万2000件、命にかかわる重大事態と認知したいじめが923件です。先生が気付いていなければこの認知もされないわけで、この数字は氷山の一角でしょう。そのうちの55万件が小学校で起きています。中

学校で11万件。つまり、小学校で中学校の５倍のいじめが起きているということです。

私が出合った最も陰湿ないじめは、登校すると捕まえられてトイレに連れていかれる、手を組んで仲がよいふりをして。そして、トイレの個室に押し込められ、便器の中に頭を突っ込まれ水を流される。「ほら、髪の毛洗ってやったよ。周りが濡れちゃったじゃねえか。おまえ、舌出して全部ふけ」と言われて、便座をなめさせられるというものでした。大人がこんなひどいことをされてその会社に行きますか？　子どもは行くんです。学校は行かなきゃいけないところと思い込んでいる子どもが圧倒的に多いです。親たちもそうです。そんななかで子どもが死んでいっています。

暴力行為は９万5000件。小学校で約６万件、中学校で約３万件。ここでも小学校の暴力行為は中学校の２倍です。昔は、むかつく教師に対して「この野郎。卒業式終わったらボコボコにしてやるからな」と息巻くイキのいい中学生・高校生がいました。今の子どもはそんなことはしません。先生を殴って損をするのは自分ですから。暴力は自分より弱い者に向かいます。

39歳までの死亡原因のトップはがんでも脳卒中でも心筋梗塞でもありません。10歳から39歳、小学校４年生から30年間にわたってわが国の死亡原因のトップは自死、自殺です。去年１年間に自ら命を絶った子どもは514人。死んでいく子どもたちが毎日１人で済まないんです。なんという社会でしょう。

子どもの自己肯定感の低さの背景にあるもの

日本の子どもの特徴を聞かれたら「自己肯定感の低さ」と私は答えます。自分のことをばかだ、駄目だと語る子どもがどれだけ多いことか。そして、児童精神科医が足りないほどメンタルの不調を訴える子どもが増えました。教育現場にいた私は、50歳過ぎてから精神保健福祉士を取得しました。薬や精神疾患についての知識がないと現場をやっていけなくなったからです。

『令和元年度版　子供・若者白書』によれば「自分自身に満足していますか」という問いに「そう思う」と答えた人は10％です。何でこんなに子どもたちは自信がないのか。私は大人の不安が関係していると思っています。子どもに失敗させたらかわいそうという大人が増えました。親が先回りして子どもの失敗を未然に防ごうとする。さらに「私は正しい親かしら？」「勉強だってスポーツだって優秀であることに越したことはない」……、こういう大人が急増しています。正しい親に見られたい、勉強のできる子、スポーツのできる子に育てたい、子どもの評価が親の評価に結び付くと勘違いしているのです。

保育園の運動会に呼ばれたことがあります。用意ドンで年長さんが走ってくるのですが、ゴール直前に逆上がりをするのです。逆上がりができないと小学校で適応できなくなるから大変だと、小さいときから何でもできるようにするんですよ。心が強くなれる大事な経験である失敗をさせない親ばかりなんです。だから小学校２年生でいじめがピークになるのでしょう。生きていたいと思う子どもたちが全然育たなくなった。もう年中さんぐらいから死にたいと言い始める。小２では実際に自殺を考える子が出てくる。そして小５になったら本当に死んじゃうんです。

「ちゃんと」、「ふつうに」、正しさが充満して弱音が吐けない。「つらいよ、だってできないんだもん」なんて言わせてもらえない。たまったストレスが怒りとなって、学校で自分より弱い者をいじめる。親から「小学校２年で九九ができなかったら、人生終わりだ」なんて言われると、学校で自分よりばかっぽい子どもに「おまえ、九九を言ってみな」。「四三十二？　四四……」「ばあか、四の段もできねえのか、死ね」という具合です。

「フリースペースたまりば」から「夢パーク」へ

私の活動の原点は、学校に行けないだけで死んでいく子どもたちとの出会いです。私は「たかが学校、されど学校」という言葉をあえて使います。令和４年、514人の子どもたちが自ら命を絶ちました。そのなかには、「たかが学校」に行けないだけで自ら命を絶った子が何人も含まれています。

子どもの命を真ん中に据えた安心して過ごせる居場所をつくる。学校を本当に安全安心で楽しい場所にしていく。これは当たり前のことです。だけど、それでも学校に行けなかったら、学校外でも育ち学ぶことが

できる選択肢を用意する、これも必要なことです。それで、私は多摩川のほとりに６畳・４畳半のアパートを借りて「フリースペースたまりば」という居場所を開きました。そこは、学校外で多様に学ぶ場であり、ともに生きていく場でした。

「子どもの権利条約」が国連で採択されたのは平成元年ですが、日本は５年後、世界で158番目という遅さでこの条約を批准しました。それから日本の国内法が整備され、令和５年に「こども基本法」がやっとできました。29年もの月日がかかっています。条約を国連に提案したポーランドの小児科医のコルチャック先生はこう言いました「子どもはだんだんと人間になるのではなく、既に人間である」。オギャーと生まれた瞬間から権利主体である一人の人間なんだということです。

虐待が増え続けています。体罰も減りません。なぜか？　「子どもは未熟なんだから、たたいてでも育てなきゃいけない、指導してやらなきゃいけない」という考え方が、まだまだ日本社会には色濃く残っているからです。私たちは、生まれた瞬間から権利主体である一人の人間である、この発想をしっかりと手に入れる必要があります。

「川崎市子どもの権利条例」をつくっているときに、私たちは「子ども市民」・「おとな市民」という言葉をつくり出しました。この社会を構成するパートナーとして子ども市民の声もしっかり聞く。ここから私たちの社会づくりが始まりました。条例第27条には「子どもの居場所」として、このような条文を入れました。

「子どもには、ありのままの自分でいること、休息して自分を取り戻すこと、自由に遊び、もしくは活動すること、または安心して人間関係をつくりあうことができる場所が大切であることを考慮し、市は居場所についての考え方の普及並びに居場所の確保及びその存続に努めるものとする」。

この条文をもとに「夢パーク」づくりが始まりました。3000坪の敷地にプレイパークをつくり、冒険遊び場をつくり、建物の中にフリースペースをつくりました。朝９時から夜９時まで開いていて、月１回の施設点検日と年末年始だけが休みです。「家ではごろごろしているだけで怒られるから好きなだけ寝っ転がらせてよ」という子どもの声に応えて、子どもたちが名付けた「ごろり」という部屋もあります。飲食もゲームもできます。乳幼児親子の部屋もあります。音楽スタジオも２つあって無料で使えます。

「やってみたい」ことに挑戦できる環境作り

子どもの育ちの３要素として私たちが川崎市に提案したのは、遊育（遊んで育つという輪）、学育（学んで育つという輪）、ケアしケアされて育つ、です。この３つのつながりのなかで子どもたちが育っていくという提案です。

冒頭で紹介した映画『ゆめパのじかん』、タイトルの「じかん」はひらがなにしています。子どもがやってみたいことにのめり込める自由な時間を表しています。一方、漢字の「時間」は「今から算数教室の時間だ、この後、英語教室もある。そうだ、水泳教室も行かなくちゃ」と、大人たちが良かれと思って切り刻んでしまった時間です。

ミヒャエル・エンデの『モモ』という作品をご存知でしょうか。時間泥棒と盗まれた時間を人間に取り返してくれた女の子の不思議な物語です。ある日、まちに灰色の男たちが現れてからすべてが変わり始めます。時間貯蓄銀行からやってきた彼らの目的は人間の時間を盗むこと。人々は時間を節約するためせかせかと生活をするようになり、人生を楽しむことを忘れてしまいます。今ほとんどの親は、この時間泥棒になっています。「有効に効率よくいろいろなことができるようになろうね。さあ頑張ろう」と子どもたちの時間を奪っている。『モモ』の中にこんな文があります。

「時間をけちけちすることで、本当は全然別の何かをけちけちしているということには誰一人気がついていないようでした。自分たちの生活が日ごとに貧しくなり、日ごとに画一的になり、日ごとに冷たくなっていることを誰一人認めようとはしませんでした」。

まさに子どもたちが置かれている現状そのものです。

「夢パーク」は、「木に登りたいんだから登らせてよ」と言って木登りした子が、運悪く落ちて骨折してしまったとします。それでも、「しょうがないじゃん、俺がやりたかったんだもん。あんたのせいだと言わないから禁止にしないでね」。こういう子どもの声を聞いて教育委員会と一緒につくってきた社会教育施設です。

私たちは目に見える責任だけを取ろうとしていないでしょうか。けがをさせないように全部禁止にする。禁止しておけば、けがをしたのは禁止を破ったおまえの責任だと言えるから。だけど、やりたいことをやらせてもらえないまま育った子どもたちはメンタルを壊し、さまざまな疾患を抱えるようになります。「心が壊れるより骨が折れたほうがましだ」という、海外で遊び場をつくった人の言葉があります。本当に心が折れてしまうんです。いつの間にか子どもたちは消費者の役割しかなくなってしまいました。高額なゲームやソフトを買ってもらった子どもたちは「これで友だちと遊べる」と喜ぶ。私たちは、高いゲームソフトを持っていないと友だちと遊ぶこともできない社会をつくってしまったのです。

遊ぶことは生きること

さまざまな地震から私たちが得た教訓が「３日間生き延びろ」です。物流が止まる。通信網がダメージを受け、電気・ガス・水道が止まる。でも、蓄えた水や食料で３日間生き延びれば何とかなります。ところが、この３日間を生き延びるための炊き出しができる若手を私たちは育てていません。小学生にまき割りをさせない、マッチを持たせない、火おこしをさせていない社会ですから。

「夢パーク」に来ている子の中には３升釜で飯を炊ける子、小学生で寸胴でお湯を沸かしてみそ汁、豚汁をつくれる子が何人もいます。この子たちも、最初、火をおこすのに３時間かかりました。「俺、火をおこせたぜ。食べ物つくれるぜ。風呂だって沸かすことできるぜ」。こうやって子どもは社会で自分も役に立つと知って育っていくんです。

子どもにとって遊ぶことは生きることそのものです。「遊びは子どもの主食です」というのは、日本医師会がつくった広報啓発ポスターですが、なぜ医師会がこんなポスターをつくらなければならないのか。友だちと一緒にいても会話もしないで冷暖房の効いた部屋の中でゲームをしているという状況に、医師会は強い危機感をもっています。健全な発達・発育のために、みんな外で遊んでくださいというポスターを医師会がつくっているのです。

遊びには今注目されている非認知能力を高める力があります。たとえば、目標に向かって頑張る、人とうまくかかわる、感情のコントロールができる、困難からしなやかに立ち上がるなどという人間として生きていく力。この非認知能力は教科書を読んでも手に入りません。遊びを通してのみ手に入る力です。

「夢パーク」では大人も子どもも泥んこになります。「夢パーク」には持ち帰れる服がある。持ち帰れる靴もある。えい、お母さんも一緒にやっちゃえ。『ドキュメント72時間』では耐えられなくなった不登校の子のお母さんがウォータースライダーを滑りました。大人が水と泥で遊ぶ姿を見て、子どもが心身ともに解放されていきます。

安心して失敗できる環境を用意することです。けがや失敗を恐れて挑戦すらしない子どもたちが増えていますが、子どもは失敗を通じて振り返り、同じ失敗を繰り返さないようにするにはどうしたらいいかを学び、悔しさを受け止め、そこからしなやかに立ち上がる力を手に入れていくのですから。

「大丈夫」安心のタネをまこう

私が出会ってきた不登校の子どもは2000人を下りません。不登校問題は大人の不安がネックになります。学校に行けなくなったらおさき真っ暗という親の不安が子どもを追い詰めます。だから、地域のなかで親がつながっていく、このまちで一緒に育てていくから大丈夫だよと声を上げていくことが必要なんです。

子どもたちと話して、気付かされたことがあります。子どもたちは、学校が安全で安心して楽しく学べるならば行きたいのです。不登校の子どもを学校に来られない駄目な子だと見ている間は、どんどん子どもは行きづらくなるんです。本当は学校に行きたい。だけど、そこが安全になっていない、安心できない、楽しくないから行けないで困っているのです。

たとえば、感覚過敏も不登校の理由の一つです。机と椅子がズズッとずれる。あの音で耳が割れるほど痛くなってしまう。これは聴覚過敏の子です。給食の時間が近づいて廊下伝いにやってくる料理のにおいで気持ちが悪くなってしまう。これは嗅覚過敏の子です。最近注目されているのは香害、柔軟剤です。思春期の女の子たちが「○○ちゃんの服いいにおい。お母さん、○○ちゃんが使っている花の香りの柔軟剤に変えて」といった調子で柔軟剤がどんどんはやって、教室開けた途端「うっ、気持ち悪い、このにおい」となってしまう子もいるのです。

父親がアルコール依存症でDVという家庭で、母親が家出をするのではないかと心配で、学校を休んで母親を見張るために学校に行かなくなった子もいました。先生の「腹の底から声を出せ」と叫ぶ声が耐え切れず学校に行けなくなった子、勉強がわからなくて行けなくなった子、いじめっ子がいるから行けなくなった子などなど、さまざまな理由が複合して学校に行けなくなります。たった一つの理由で学校に行けなくなるなんてことは、めったにありません。だけど、周りの大人がうるさいからとりあえず、学校の先生が怖いから行かないとか、勉強がわからないから行かないとか、その場しのぎで子どもはいろいろな理由を言います。だけど、本当は自分が学校に行けない理由は自分でもわかっていないんです。

体に反応が出たらもう体の声を聞くしかありません。「おなかが痛い・頭が痛い」はわかりやすいですね。「目をぱちぱち・しばしばしている」「えへん、えへん」といった症状はチック現象で、本人の意思とは関係なく出てしまうのです。先日出会った子は音声チックでした。緊張すると「ああ、ああ」と声が出てしまうのですが、それを先生が授業の妨害をしているとして怒ったそうです。教室から出されたその子はクラスメートから「うるせえんだよ、死ね」と罵声を浴びせられて不登校になりました。先生が音声チックを理解していれば不登校にならないですんだのです。

文部科学省から「不登校はその行為を『問題行動』と判断してはならない。不登校児童・生徒が悪いという根強い偏見を払拭し、学校・家庭・社会が不登校児童・生徒に寄り添い、共感的理解と受容の姿勢をもつことが大事だ」という初等中等教育局長通知が出されました。不登校は問題行動じゃなく、不登校の子は悪い子でもないというのが文部科学省の考え方です。このことを皆さんに知っていただきたいと思っています。不登校の時間が、自分にとって意味のある時間だったと思えるように支えてあげたらいいんです。

「教育機会確保法」という法律ができました。どこで学んでもいい。どうしても学校に来ることができなければ、学校以外の場で学んでいいという法律です。さらに、「学校に行けなかったら休むことが必要です」とも明記されています。在宅でタブレットでの学習がオフィシャルな学校の出席として認められた数は１万件を超えました。そういう時代を迎えています。

生きているだけでOKを伝える場

「夢パーク」内にある「フリースペースえん」は、不登校やひきこもりの子どもたちのための日本初の公設民営の場所です。ここには、台所があります。毎日お昼ご飯をつくって食べます。冷蔵庫・食器棚があって、手づくりの囲炉裏の横のちゃぶ台で学習しています。その横で楽器の演奏、ゲームをしていたり、その隣で絵を描いたり、ものづくりをしたり、本を読んだり、パソコンをやったり、相談したり……、こんなカオスのような生活空間をつくっています。人数が増えたので２階もつくってくれました。個別の学習ができたり、講座で使える部屋も広がりました。

発達障害、知的障害はもちろん、精神疾患、統合失調症やうつ病の人も、食事介助が必要な人も車椅子の人も、ちょっとやんちゃで鑑別所を出たり入ったりしている人も誰でも受け入れていて、異年齢が混ざり合える空間になっています。無料です。

ここは、私たちの基本理念である「生きているだけでOKだよ」という場所です。学校に行けるとか行けないとか、勉強ができるとかできないとか。そんなことじゃない。君は生まれてきただけで奇跡だからとい

うメッセージを届ける場づくりをしています。文部科学省の考え方も目先の学校復帰のみにこだわらず長いスパンで見て、将来的・社会的自立をめざすというふうに変わってきました。

暮らしのなかには、学びの要素がいっぱい詰まっています。毎日の昼ご飯をつくって食べることを大事にしています。1日に30～40食つくります。これは32年前からずっと続いています。朝メンバーでメニューを決めて、畑で収穫、近所のスーパーで買い物して、それからつくります。「おいしい・うれしい・たのしい」でつながる仲間です。「つくってくれた人、ありがとう」という声が飛び交います。こういう場を地域のなかにつくっていくことが求められていると思います。不登校支援の話だけをしているわけではありません。

「なにもしない」ことを保障していこう

今やこども食堂は日本全国に7000か所以上あるといわれています。地域のなかで一緒にご飯を食べるだけで、子どもは元気になっていきます。一方で、気をつけなければいけないのは、何かしてあげないと落ち着かない大人が増えていることです。私たちは、その支援が本当に子どもが望んでいることなのかを考える必要があります。

「夢パーク」の合言葉は「大人の良かれは、子どもの迷惑」です。あなたのためよと差し出されるメニューが、子どもを苦しめていないでしょうか。学校に行かなくなって、ほっとしたのに、支援という名の下にひきこもり支援として取り囲む。これが子どもには苦しいのです。だから、まずは何もしないということを保障してあげてください。弱さをさらけ出せる、正しくもない、大して重要でもない無駄話ができる仲間や空間が大事なのです。「支援してあげる」という気持ちで近づいてくる大人に対しては、「やべえ、支援のにおいがしてる」と感じて、子どもたちは逃げていきます。

私たちは学校外で多様に学んでいくために、いろいろな講座をやっています。例えばB.B.モフランという劇団四季のライオンキングの初代パーカッショニストの講座もあります。彼は20年前から千葉県から毎月通ってきてくれて、私たちにアフリカンパーカッションを教えてくれます。

やるかやらないかはその子自身が決める自己選択であるということを保障して、さまざまな知識を獲得したり、文化と出合う機会を用意していきます。南米のフォルクローレ演奏、芝居、ダンス、アートの時間などがありますが、極めつけは89歳現役の平林先生、ヒラセンです。教師を60年以上しているヒラセンと小学校1年生のときに出会い「科学っておもしろい」と叫んだ少年は、学校には行きませんでしたが、その後、彼はアメリカに渡って今はアメリカの大学で物理学科長をやっています。

ヒラセンに「学力って何ですか？」と聞きました。先生はうっすら目を開いて、「出合いをものにする力ですかね」と言いました。しびれる言葉です。どんな子だって、知りたい、わかりたい、やってみたいと思っているんです。時間を忘れておもしろいことに集中するのが子どもでしょう。なのに、大人はすぐつまらない評価のまなざしを持ち込みます。「そんなところで穴を掘ってる場合じゃないだろう。算数の勉強をやらなきゃ駄目だろう」と言って、遊ぶ・探求する・挑戦する力を奪っていくのです。

子どもは試行錯誤を繰り返し、小さな失敗を経験しながら出合いをものにする力を育んでいきます。大人にできるのは伸びていこうとする子どもの邪魔をしない、好奇心の芽をつまないことです。勉強したいと子どもが言えば、私たちスタッフも大学生のボランティアもしっかりと教えます。学校とフリースペースは連携しています。

川崎市民に限らず、東京都や横浜市から通ってきている子も、フリースペースに通うことが学校の出席として扱われます。不登校の子どもに、「そろそろ君も高校受験の勉強をしたほうがいい」などと私たちは一言も言いません。でも、「こんな私でだいじょうぶ」という思いが充電されると、「あれだけゲームをやっていた先輩や外で泥遊びをやっていた先輩が高校に行くんだ。へえ、高校って何があるんだろう？　俺も行ってみようかな」と先輩の様子を見て自分で考えて、自分から高校に行く準備を始めます。でも、私たちはこれがゴールだとは思っていません。高校に行けたからいいかどうかなんてわからない。子どもを信じて、子どものやる気を奪わなければいいんですよ。

「困った子」ではなく「困っている子」だった

児童精神科医が言います。「ここにいる大人たちは、みんな多動のDNAをもっている」。人類は、身を守り家族を守るために弓矢をつくり、槍をつくり、火をおこすことで襲ってくる獣を追い払ってきました。多動だから生き残ることができた何万年の人類の歴史の、直近150年で劇的に社会が変わりました。

６歳になった途端に学校という教室のなかに入れられます。「じっと座っていなさい。先生を見て。黒板見て。動いちゃ駄目。しゃべっちゃ駄目」。そして、これを守ることができない子どもは「障害」という名前が付けられ、発達障害とラベリングされ、特別支援教育という名の下に分けられていきます。

学校という制度は150年前、明治政府が富国強兵政策の下につくり出したものです。強い軍隊をつくるために「右向け右」で右を向く子どもを育てる。これが、明治政府が必要とした学校教育でした。月日は流れ、人類は月に着陸し、スマホで地球の反対側に住んでいる友だちとリアルタイムで顔を見ながら通話ができる時代になりました。社会が変わったのに、どうして学校教育のシステムだけは変わらないのでしょうか。じっと座っていられない子は障害者になるなんて、どこかおかしくないですか。

学校一の問題児といわれて放校処分になった多動の子どもが「夢パーク」に来ました。私はスタッフに「この子がもっている得意なところに光を当てよう、いいとこ探しをしよう」と提案しました。この子は毎日走り回ります。本当によく動く子でした。ある日、スタッフがペンキ塗りをしているところに来て、そのはけを取り上げて走り回って小屋とかを塗り始めました。気が付くと、生木にまで塗り始めていたので、慌てて板と筆を渡しました。この子はニコニコして、来る日も来る日も板に色を塗りました。結果的にこの子の情緒は安定して、小学校は放校処分になったのに高校に行ってしまったんです。

この子は困った子じゃなくて困っている子だったんです。この子を学校不適応児とラベリングをするのは大変失礼な話で、一人ひとりの子どもに適応できない学校教育のほうの課題です。私たちの取組は医学モデルよりも社会モデルといわれるものです。障害は体の内側にあるんじゃない、外側にあるという考え方。その人を直そうとか治療しようという見方じゃなくて、社会のほう、環境のほうを変えていこうと考えるのです。

「生きる」を育むまなざし

自閉症スペクトラムのケイスケは図鑑を買ってもらうと、すぐに切り絵を始めます。「高額な図鑑を買ってもすぐに切っちゃうんです」というのがお母さんの悩みでした。過去の動物、現在の動物、未来の想像上の動物、豊かなアートセンスで彼は切り取ります。下絵を描くこともなく、どこにどの色が来るかまで考えて、自由にはさみを動かして切り取ります。吐き捨てられた１個のガムで３体の恐竜もつくりました。でもケイスケは不登校の子にさせられてしまいました。多動でガムを吐き捨てたりするなど、問題行動を起こしてしまう子は、学校でも社会でも邪魔にされてしまうんです。

ケイスケはいろいろな問題行動を起こします。お母さんが『ドキュメント72時間』でインタビューに答えています。「このまま２人で消えてしまいたいと思ったこともいっぱいある」、そう言いました。でも「夢パーク」に来て、お母さんの考え方が変わっていきます。「自分の心を一番楽にしてくれたのは、このままのこの子が素敵だというそういう人たちのまなざしだった」。私たちはケイスケが大好きだから「今日は何つくって遊ぶ？」と言ってケイスケがいるだけでうれしい。スタッフのまなざしを受けてケイスケはどんどん成長していきました。最後にお母さんは声を詰まらせながら言いました。「生まれ変わっても私の息子で生まれてきてほしい」。

『ドキュメント72時間』を見た学校の先生から「悔しい。小学校は何もできず、あの子を不登校児童にしてしまい、しかもお母さんの悩みがここまで深いことも気付いていなかった。そのお母さんが『生まれ変わっても私の子で生まれてほしい』と言った夢パークの取組を知りたい」という連絡をもらって、先生がここに通ってこられました。その後、先生はケイスケが来ることができるような学校にするにはどうしたらいいか？　という話し合いを学校でもちました。その後、学校は劇的に変わっていきます。お母さんの手紙には

「ケイスケは今、週に２日学校に行くようになりました」と書かれていました。

「めんどうくさい」を手放さない

不登校児童・生徒を問題児と見ている間は何も変わりません。どうすれば、あの子が来られる学校になるかをみんなで真剣に考えて行動したら、学校が変わります。子どもを悪者にするんじゃなく、不登校になった親を責めるんじゃなく、まち全体で、みんなで、見方を変えることができたら、子どもは楽になって学校でも、どこでも外に出られるようになります。親も楽になります。

子どもは「助けて」と言葉にすることができません。だから、私たち大人が子どものSOSをキャッチしてあげなければならないのです。私たちは「発見する相談」と呼んでいますが、待っていても子どもは相談になんか来ません。「あの子、おなか空かせているな」「近寄ると臭うから風呂に入っていないかもしれない」「家に帰ろうとしない。家庭で虐待が起きているかもしれない」……。子どもの傍らにいる大人が子どものSOSをキャッチするアンテナを身に付けることが大事です。

毎日のように物を壊す子どもがいました。「また壊したのか。自分で壊したんだから自分で片付けなさい」「嫌だね」と言って、この子は１周400メートルの「夢パーク」の周回道路を逃げていきます。そのまま出口まで行けば家まで逃げ帰れるのに、くるりと向きを変えて、来いよと誘います。捕まえてほしいんでしょう。構ってほしいんでしょう。

つまり、地域で問題行動を起こしていると感じられる子どもたち、こども食堂に来てうるさい子ども、学習支援でも問題を起こすうるさい子どもたちは、「助けて」というSOSを上げているんです。試し行動なのです。構ってほしいんです。だから私たちはまちづくりをしていくにあたって、「めんどうくさい」を手放さない、かかわり続ける覚悟をもつことを大事にしています。それでも子どもの行動に怒りが湧いてくることがあります。そのときには、まず自分のものさしを疑う練習をしています。自分はあいつの胸ぐらをつかんで殴りたいほど怒っている。でも隣にいるスタッフは「思春期のがきんちょなんてこんなもの、放っときゃいいですよ」と言う。

そのときに、私がどの地域でどういう家庭環境でどういう学校で育ってきたか、私が正しいと思っているものさしは絶対なのかを考え、境界線の混乱に気付ける自分であることが大事だと思います。

コロナで一斉休校になったとき、親たちが困ったのは「勉強が遅れる」よりも「託児機能」でした。このまちで託児機能をもった居場所を増やしていく。これが広がれば、学校に行けなくなってもなんとかなる。安全で安心していられる場と人間関係、あとは周りの大人たちの肯定的なまなざし、これさえあれば子どもは育つんです。

まず大人が幸せになってください

子ども権利条例をつくっていて、来月から施行されるという平成13年３月、私が市民報告集会で説明をしていると、入口が開いて子どもたちが数人なだれ込んできました。年長の女の子が私のマイクを取り上げてしゃべりはじめました。

「まず大人が幸せでいてください。大人が幸せじゃないのに子どもだけ幸せにはなれません。大人が幸せでないと子どもに虐待とか体罰が起きます。条例に『子どもは愛情を持って育まれる』とありますが、まず家庭や学校、地域のなかで大人が幸せでいてほしいのです。子どもはそういうなかで安心して生きることができます」。

やられたと思いました。汗が噴き出て穴があったら入りたいほど恥ずかしかった。条例をつくってドヤ顔でいたけど、子どもは先の先まで読んでいたのです。「あんたたち大人が幸せじゃなかったら私たち幸せにはなれないから」。見事だったので、川崎の母子手帳に記載されることになりました。

30年間子どもたちと出会ってきて気付かされたのは、生きているだけでOKということです。to doじゃなくてto be。何かをする・できるじゃない。ある・いるということです。生まれてくれてありがとう。あなたがいて幸せだよ。これを伝えていけたらいいんです。

まず、大人たちが幸せになって、子どもたちが「生まれてきてよかった」「生きてるって楽しいよ」、何てことのない日常を大事にしながら暮らしのなかで誰もが「助けて」を言える、助けあえる、支えあえる。そんなまちを一緒につくっていけたらと思います。

分科会 1 思いに寄り添う つながりのまち
～気にかけあい そばにいる～

実践報告

(1) こどもや家族のための居心地のよい場づくり
～食堂での交流を通じた地域での見守り～

鴨居こども食堂ぱくぱく／鴨居地区社会福祉協議会／
鴨居地区民生委員児童委員協議会／鴨居地域ケアプラザ／
緑区社会福祉協議会 【緑区】

(2) 誰もが生きがいを持って暮らせる地域を目指して
～孤立を防ぐゆるやかなつながりづくり～

市沢地区民生委員児童委員協議会／和＆輪／
左近山地域ケアプラザ／旭区社会福祉協議会 【旭区】

ねらい

一人ひとりの困りごとを地域と専門職がともに受け止め、身近な地域で支えあう取組が育まれています。「生きづらさ」を抱える人が孤立することなく、安心して自分らしく暮らしてくために、寄り添い、支えあえる地域づくりの必要性を考えます。

コーディネーター

永田 祐 氏
同志社大学 社会学部
社会福祉学科 教授

❖専門は地域福祉ほか。立教大学、愛知淑徳大学の講師等を経て現在に至る。「志」のある実践者同士が出会い、つながり、つくり出す地域でのさまざまな活動やそれを可能にするための仕組みづくり、市町村を中心とした「困っている人」を真ん中においた支援の仕組みづくりについて研究している。
また、社会福祉士として、成年後見など、権利擁護の活動にもかかわっている。

分科会 2

垣根を越えて 地域に根差す まちづくり
～連携（○○×□□）で育む～

実践報告

(1) オール栄であたたかなつながりを
～食を通じた困りごと支援～

上郷西地区社会福祉協議会／ SELP・杜／
栄区社会福祉協議会 【栄区】

(2) 子どもたちとともに育つ地域（まち）を目指して
～つながる、広がる、「はな♡そうカフェ」とともに～

寺尾第二地区社会福祉協議会／
馬場地域ケアプラザ 【鶴見区】

ねらい

住民、教育機関、福祉施設、企業など地域にある様々な主体がつながることで、まちづくりの新たな可能性が広がります。それぞれの強みを生かした連携のポイントについて、実践事例を通じて共有します。

コーディネーター

渡辺 裕一 氏
武蔵野大学 人間科学部
社会福祉学科 教授

❖駒澤大学大学院人文科学研究科社会学専攻博士後期課程修了。博士（社会学）。
東北女子短期大学生活科講師、健康科学大学健康科学部福祉心理学科准教授、武蔵野大学人間科学部社会福祉学科准教授を経て、平成 29 年 4 月より現職。専門は高齢者福祉とソーシャルワーク、ソーシャルワーク教育。

鶴見区

栄区

分科会1 思いに寄り添う　つながりのまち
～気にかけあい　そばにいる～

コーディネーター
永田　祐
（同志社大学 社会学部
社会福祉学科　教授）

実践報告に先立って、地域社会の未来についてお話しします。日本はこれから総人口が減少していくなか、高齢者（特に75歳以上の高齢者）の占める割合が増加していくことが想定されます。

一方で、地域でつながりの希薄化が進んでいます。60歳以上の男女を対象に「近所の人たちと親しくつきあっている」という人の割合を調査したところ、昭和63年は64.4%でしたが平成26年には31.9%に半減していました。若い世代はもっと地域とのつながりが希薄化していると思います。そのなかで深刻な社会問題になっているのが孤立で、国も孤独・孤立対策担当大臣を置いて、課題に取り組んでいます。

こういった状況がさまざまな形で問題として現れていますが、そのひとつが8050問題です。長期に渡ってひきこもっている50代と80代の親が同居し、社会的に孤立している世帯が増加しているのです。ＳＯＳを出せない人、他者に相談できない人が非常に多くなってきました。コロナ禍で外出自粛になった期間は、多くの人が社会的孤立を身近な問題として実感したのではないでしょうか。サロン活動などが中止になったことで高齢者の認知機能や身体機能が急激に衰えるケースが目立ちましたし、コロナ禍の期間には自殺者数、ＤＶ相談件数、児童虐待相談件数が増加しましたが、社会的孤立が一因とされています。

このように人口減少や少子高齢化、つながりの希薄化、社会的孤立といった課題を踏まえてこれからの福祉を考えたとき、「地域共生社会」の実現という大きなコンセプトを掲げて、取組を進めていくことを提案したいと思います。地域共生社会とはすべての人々が地域、暮らし、生きがいをともにつくり、高め合うことができる社会のこと。そのためには、支え手側と受け手側に分かれるのではなく、地域のあらゆる住民が役割をもち、支えあいながら、自分らしく活躍できる地域コミュニティをつくっていく。たとえ障害があっても、認知症があっても、できることがあって活躍する場がある。そんな第二の居場所をたくさんつくるという考え方です。

ひきこもりの方を対象にしたアンケート調査のなかで「どのような変化によって生きづらい状況が改善しましたか」という問いかけに対して、一番多かった答えは「安心できる居場所が見つかったとき」で、二番目が「自己肯定感を獲得したとき」でした。ひきこもりの人に限らず、誰にとっても安心できる居場所と、自分が必要とされている感覚は重要なものです。

居場所に必要なものは役割だと考えます。私たちは職場や家庭、地域社会で「役割の束」のなかを生きています。家庭では家事を担い、地域では民生委員としての役割を果たしている人もいるでしょう。しかし孤立した状態とは役割がない状態で、認められる場もなくなるので、自己肯定感が低くなってしまいます。居場所と自己肯定感はセットなのです。そして役割は人との関係のなかで生まれるのです。

しかし地域のなかに居場所をつくっても、孤立している人が積極的に参加するわけではありません。孤立している人の多くは自らＳＯＳを出すことが難しいからです。その背景にはさまざまな要因があって、どうせ誰も助けてくれないとあきらめていたり、自暴自棄になっていることもあります。しかし自ら助けを求め

られないとそのまま潜在化してしまい、顕在化して専門職がかかわるころには問題がかなり深刻化してまう場合が多いといわれています。

行政や専門職は、問題が潜在化している間は基本的にかかわることができません。制度からはみ出した支援を行うことは難しいのです。潜在的な困りごとのある状態でかかわることができるのは地域の住民です。顔見知りの関係をつくって住民同士がつながると、誰かが困っているときに誰かが気づくことができます。地域共生社会は専門職だけではつくることができないのです。

最後に地域共生社会のイメージが具体的に伝わるような事例を紹介しましょう。大阪府阪南市の話です。長く米作りに携わっていた高齢者が要支援になり「もう田んぼはやめようと思う」と市社会福祉協議会の職員に話したのですが、会話を交わすなかで「この方はまだ米づくりを続けたいのだな」と感じた職員は「手伝ってくれる人を探すから、もう少し続けませんか」と提案しました。実際に田んぼの作業を手伝う担い手が集まり、秋になるとお米も収穫できたそうです。要支援の高齢者は「みんなでつくったお米だから地域のために役立てたい」と言ってこども食堂にお米を寄付したのですが、子どもたちが喜んで、翌年から田んぼの手伝いをするようになりました。

この事例では誰が支えられる人で、誰が支える人でしょうか。要支援の高齢者も子どもたちも最初は「支えられる側」でしたが、取組のなかで「支える側」に入れ替わっています。支援される「人」がいるのではなく、支援される「とき」があるのです。このような支えあいの循環が、地域のなかで広がっていくことが地域共生社会の考え方だと考えています。

実践報告 01

こどもや家族のための居心地のよい場づくり
～食堂での交流を通じた地域での見守り～

鴨居こども食堂ぱくぱく／鴨居地区社会福祉協議会／鴨居地区民生委員児童委員協議会／鴨居地域ケアプラザ／緑区社会福祉協議会【緑区】

西田　まず鴨居地区について簡単に紹介します。緑区の東側に位置する南北に細長い地区で、人口は約１万6000人、7600世帯、高齢化率は約24％です。桜まつり、盆踊りなど子どもから大人まで楽しめる地域行事がたくさんあって、地区社会福祉協議会（以下、地区社協）でも親子でおやつ作りに取り組む教室や折り紙教室を開催しています。今回はこども食堂を実施するなかで感じたこと、大切にしていることをお話します。

鈴木　鴨居こども食堂ぱくぱく（以下、「ぱくぱく」）は令和元年10月に発足し、地域ケアプラザ（以下、ケアプラザ）で毎週木曜17時30分から19時まで開催しています。現在の利用者は約40人で事前予約制。スタッフは鴨居地区の民生委員・児童委員（以下、民生委員）を中心に地域ボランティアとケアプラザの職員で構成されています。みんなで温かいご飯を食べる居場所です。

鈴木　道子（鴨居こども食堂ぱくぱく 代表）
西川　克美（鴨居地区社会福祉協議会 副会長／鴨居地区民生委員児童委員協議会 会長）
古屋　陽子（鴨居地区主任児童委員）
伊藤　直美（鴨居地域ケアプラザ 生活支援コーディネーター）
西田　　素（緑区社会福祉協議会）

まず立ち上げの経緯をお話します。私が会長を務めていた鴨居地区民生委員児童委員協議会（以下、民児協）の定例会に地域子育て支援拠点と区社会福祉協議

会（以下、区社協）の職員から「緊急でボランティアを探している」という相談がありました。週一回、ひとり親世帯のＡちゃんを保育園に迎えにいって、Ａちゃんの家で夕飯を食べさせながら母親の帰りを待ってくれる人ということでしたが、なかなか見つかりません。地区社協や自治会にも相談して話し合った結果「地域でこの親子を支援できる場として、こども食堂をつくろう」ということになりました。民生委員はもともと高齢者向けの食事会を手伝っていたことと、子どもの居場所をつくりたいと考えていたことから、こども食堂というアイデアが生まれました。そこでケアプラザを借りられないかと打診しました。

伊藤　ケアプラザも定例会に参加してAちゃん親子の困りごとを聞いていたため、何かできないか職員同士話し合っていたところに、民生委員さんからこども食堂のお話をいただきました。以前から鴨居地区では、「誰でも立ち寄れる場所を作りたい」と考えていたことを知っていたので、すぐにこども食堂を実施できるように部屋を調整し、協力できる体制づくりに取りかかりました。

鈴木　開催に向けて、役割分担や運営方法などについて民生委員、地区社協、ケアプラザ、区社協、子育て支援拠点などと話し合いを重ねました。また保育園とも事前の打ち合わせを行いました。

西川　最初の相談からわずか３週間で、緑区で第１号となるこども食堂がオープンしました。私たちはドキドキしながら初日を迎えましたが、Aちゃんは泣くこともなく母親が迎えにくるのを待っていました。初日を無事に終えることができ、ケアプラザの玄関までお見送りしたとき、スタッフみんなでほっとしたことを覚えています。

　ところが「ぱくぱく」の活動が軌道に乗ってきたころ、コロナ禍に見舞われました。ケアプラザが休館になったので「ぱくぱく」の活動も休止に追い込まれます。ここでAちゃん親子とのつながりを途絶えさせたくないという思いで、見守りを続けました。コロナ禍が収束して活動を再開したところ、10人程度だった利用者はだんだん増えて、令和４年末には30人、翌年８月には40人になりました。

伊藤　ケアプラザでは「ぱくぱく」をどのように応援していくか考えた結果、民生委員さんの代わりに電話の受け付けや出欠の確認など、申し込み窓口の業務を担うことになりました。誰もが利用できるケアプラザが窓口になったことで、利用者にとって相談しやすい環境になったと思います。初めて参加する方については、「ぱくぱく」のみなさんと相談しながら、その方にとって居心地のよい場所になるように対応しています。

古屋　利用者が増加した背景についてお話します。主任児童委員は鴨居地区の小中学校と定期的に顔合わせを行っていますが、その連絡会のなかで「ぱくぱく」について説明し、申し込み用紙を全校生徒に配布してもらったりしました。校内の掲示板や相談室に貼り出したチラシを見て申し込んでくる方もいます。また「ぱくぱく」と同じ時間帯に実施している学習支援に参加している生徒にも食事を提供できるように、ケアプラザが協力してくれています。さらにケアプラザや区社協に支援を求めてきた方が「ぱくぱく」を紹介されるというケースもありますし、利用者が友人を誘ってくださることもあります。鴨居地区以外の利用者が参加することもありますが、その場合は他地区の主任児童委員と連携して見守りを行っています。

鈴木　「ぱくぱく」の利用者は子どもから大人までさまざまです。中学生や、祖父と孫で参加していたり、高齢の参加者もいます。参加者のみなさんは、会場がケアプラザなので安心して参加できるとおっしゃいます。区社協に食支援で訪れたことがきっかけで「ぱくぱく」とつながった方は、区社協やケアプラザも定期的に見守りができるようになり、「ぱくぱく」のスタッフとも打ち解けて話すことができるようになりました。地域の行事への参加をお勧めしたところ、参加するようになって、地域とのつながりが生まれています。

西川　「ぱくぱく」の利用者は参加の仕方もさまざまです。たとえば不登校ぎみの中学生や高校生は、利用者ではなくボランティアとしてお誘いしました。また高齢の方には受付や会計の業務をお誘いしています。その方は「ボランティアがとても楽しい」とうれしそうにお話されます。スタッフとしては参加しやすい方法で参加してくれればよいと考えており、利用者とボランティアの境目もあまり意識していません。

古屋　食事のメニューはボランティアに負担がかからないように、一部市販品も取り入れて調理しています。

お菓子や果物も用意しています。子どもたちは食べ終わった後の遊びが楽しみな様子で、職員と一緒におもちゃで遊んだり、走りまわったりしています。

西川　立ち上げのきっかけをつくってくれたAちゃんは小学生になりましたが、いまでも毎回、親子で参加しています。お母さんはスタッフと信頼関係が深まりママ友のような関係を築いて、いろいろな話ができるようになりました。新しく参加してくる子どもたちの見守りもしてくれます。

鈴木　次に「ぱくぱく」と地域とのかかわりについてお話します。スタッフの中心は民生委員で、民児協の定例会や地区社協の定例会、地域福祉保健計画の会議で「ぱくぱく」の様子について報告しています。その結果、多くの方が活動内容を理解して応援してくれています。立ち上げのときには地区社協と横浜市から助成金をいただき、現在は緑区社協からふれあい助成金をいただいています。また、個人や団体からの寄付を受けたり、野菜やお米を届けてくださる方もいて感謝しています。

　また地区社協主催のおまつりなどに参加して、地域のさまざまな団体に活動を知っていただくように努めています。

古屋　意識していることは、まず、おいしいご飯をつくることです。利用者にはご飯をいっぱい食べて、元気な顔を見せてほしいからです。2つ目は利用者全員に声をかけること。疲れていないか、体調はどうかなどを伺いながら、状態を把握します。いつもと違っていておかしいと感じたら、すぐにみなさんと相談し、「ぱくぱく」で解決できないときは学校の先生などにかかわってもらうことがあります。3つ目は親がくつろげる時間になるように配慮すること。仕事や家事、育児に追われているお母さん、お父さんが子どもと一緒にご飯を食べてくつろいでほしいと願っています。4つ目に意識していることとして「なんとかなる」という思いがあります。準備期間が3週間しかなくてもなんとかなる。当日、利用者が増えてもなんとかなるという気持ちで活動しています。問題が起きても、みんなで知恵を出し合いながら、なんとかしてきました。

西川　最後に「ぱくぱく」への思いを述べます。まずスタッフが無理なく活動を続けられること。次に、多くの人に活動を知っていただき、つながりが必要な家庭に届くこと。そして「ぱくぱく」のご飯を食べて笑顔になる子どもが増えていくように、継続的に見守って、居心地のよい場所にしていきます。鴨居地区で立ち上げた活動ですが、いまでは利用者やボランティア、応援してくれる人たちも、近隣の地域に広がっています。スタッフやボランティアのみなさんの知恵と行動力があったからこそ、ここまでくることができました。みなさん、ありがとうございました。

質疑応答

【Q1】

永田　ひとり親家庭のお子さんを預かるボランティアがなかなか見つからなくて困ったそうですが、それでもなんとかしようと思ったのはどんな思いだったのでしょうか。

鈴木　もともと、3歳の子どもの運動量が相当なものであること、家でお母さんが帰って来るのを待つわけですから男性は難しいこと、さらに、毎週木曜日ということは働いているお母さんには無理だろうなどの理由から、これはハードルが高いと思いました。鴨居地区全体で探しましたが、やはり見つかりませんでした。

　「無理です」とお断りすることもできたのですが、話を聞いているうちに、お母さんの困りごとはそれ以外にもあることがわかってきました。また、Aちゃんの問題は氷山の一角で、他にも困っているお子さんがいるかもしれない。民生委員としてこれはなんとかしないといけないと思いました。

　タイミングもよかったです。相談をいただいた9月は、敬老会や鴨居まつりで民生委員や自治会、地区社協の役員が集まることが多い月のため、みんなで話し合うなかで「なんとかしましょう」という雰囲気になっていきました。もともと居場所づくりに興味をもっていたこともあって、「こども食堂をやってみよう」となったのですが、行きあたりばったりだし、勢いでやってしまったというところもちょっとあります（笑）。

【Q2】

永田　こども食堂というと、世間では困っている子どもがご飯を食べるところというイメージがあります。しかしやりとりと聞いていると、「ぱくぱく」はいろんな人にとって居心地がいい場所で、ご飯はもちろん、人とつながったり自分が活躍できる場になっているこ

とを感じました。

学校は一般的に「ひとつの団体にそんな協力できない」などと言われるパターンがあると思うのですが、学校の反応はどうでしたか？

古屋　たしかに、ぱくぱくのチラシをもって行ったとき、学校側は「どのように周知したらよいのか」と困惑気味でしたが、学校側に「困っている家庭にだけチラシを配るわけにはいかない」という事情があることは私たちもわかっていました。もともと学校とは、地域のイベント会場として校庭を使わせてもらうなど、地域の活動を応援してくれる関係を築けていたことが幸いしました。「学校と家以外の居場所も大切」という判断で、ぱくぱくのＰＲに協力してくれることになりました。

ただ、そのときはコロナ禍で、会場で飲食できる人数などに厳しい制限があったので、どのように周知するかは私たちも迷いました。考えた末、昇降口や廊下などにチラシを掲示したり、相談室に置いてもらいました。今もその形です。

全校生徒にぱくぱくのチラシを配布してくださったことがあり、そのときは一気に利用者が増えました。ただ、そのときの利用者が全員継続しているわけではありません。継続して来ている人は地域とつながりたい人で、ぱくぱくを必要としている人だと感じています。

【Q3】

永田　学校だけでなく、ケアプラザ、地域、社協などがうまく連携して、地域のなかにこういう活動ができていくといいなと思って伺いました。みなさんの活動が、地域にどんな影響を及ぼしていると感じますか。

西川　今まで緑区にケアプラザや区社協と一緒に取り組んでいるこども食堂はありませんでした。また、鴨居の人たちは子どもへの関心も高く、立ち上げのころからぱくぱくに注目してくださっています。

緑区で初めてのこども食堂ということもあり、区内からこども食堂を作りたいと考えている人たちが見学に来てくれたこともあります。その結果、緑区のほかの地区でもこども食堂ができたと聞いています。

コーディネーターコメント

緑区の事例には大切なポイントがいくつも出てきましたが、一番印象的だったことは、スタッフだけでなく利用者も含めていろいろな人が、いろいろな役割を発揮できる居場所になっていたことです。たとえば高齢の方が受付や事務を手伝うボランティアとして生き生きと活躍されているというお話でした。「利用者とボランティアの境目をあまり気にしない」と話されていましたが、助ける人、助けられる人をはっきり分けないことで、利用者のみなさんがどんどん元気になっていく事例だったと思います。

実践報告 02

誰もが生きがいを持って暮らせる地域を目指して
～孤立を防ぐゆるやかなつながりづくり～

市沢地区民生委員児童委員協議会／和＆輪（なごみあんどわ）／
左近山地域ケアプラザ／旭区社会福祉協議会【旭区】

山田　まず市沢地区の紹介です。旭区の南東部、保土ケ谷区との区境に位置し、南北に環状２号線が通り、土地利用が住宅地と農地・樹林地に分かれていることが特徴です。山坂が多く、バス便も少ないため移動に困難を抱えている方が多くいます。６つの町内会自治会という区内では小さめの地区ですが、サロンやちょこっとボランティアなどの地域活動が活発な地域です。今回は一組のご夫妻を中心にしたお話ですが、まず区社協あんしんセンターの担当者からきっかけについてお話します。

梅崎　精神障害のある50代のＡさんと奥様が、区外から旭区の市沢地区に転居してきたことが発端です。

松井　加代子（市沢地区民生委員児童委員協議会 民生委員）
尾亦　　佳子（和&輪〔なごみあんどわ〕代表）
橘　　操（左近山地域ケアプラザ 地域活動交流コーディネーター）
梅崎　　寛子（旭区社会福祉協議会）
山田　　綾香（旭区社会福祉協議会）

転居前にAさんを支援していた方から、「金銭管理のお手伝いをしてほしい」という相談が、旭区社協のあんしんセンターにありました。あんしんセンターとは生活や金銭管理など権利擁護に関する相談窓口で、主に日常的な金銭管理が困難な高齢者や障害者に代わって、出納や支払いなどを支援しています。金銭管理を行うだけでなく、「困りごとはないか」「身近に相談できる顔見知りの人はいるか」といった視点をもちながらかかわるようにしています。

Aさんは絵を描くことが趣味で、ご自宅に伺うとやさしいタッチの絵をたくさん見せてくださいました。奥様は控えめでご主人を頼っている印象で、ご主人と一緒でなければ外出も難しい様子でした。あんしんセンターの利用が始まった当初、Aさんから「引っ越してきたばかりで近くに知り合いがいない」という相談を受けたので、「民生委員さんと顔見知りになりませんか」と提案したのです。

山田　旭区は、民生委員のみなさんが中心となり「つながり食料支援事業」という独自の事業をコロナ禍に始めていました。農家さんなどから提供していただいた野菜を、民生委員さんが支援が必要な世帯に月１回届け、その際にいろいろなお話をしながらつながりをつくることが目的です。Aさん夫妻を担当している民生委員の松井さん、日ごろ、どのようにかかわっているのかお話しいただけますか。

松井　月１回、訪問して「お元気ですか。お変わりありませんか」とお声かけしています。特別なかかわりをしたわけではないのですが、Aさんは困ったことがあると「こんなことで困っています」と話してくれます。私自身で対応できることであればいたしますし、難しいときは区社協やあんしんセンターのみなさんと連携をとって対応しています。

梅崎　あんしんセンターでは日ごろから「お店が遠くて買い物が不便だ」といったお話を伺っていましたが、ある日、会話のなかで「知り合いも友だちもいないので、地域に知り合いがほしいんだよね」とつぶやかれたのです。地域に知り合いがほしいという気持ちを感じて、地区担当の山田さんに相談することにしました。

山田　地区内ではさまざまなサロンが行われているので、地域の状況をよく知っているケアプラザに相談することにしました。

橘　精神障害がある方ですので苦手なことも多いと思いますが、「地域の方とつながりをもちたい」という気持ちを大切にしたいと一番に思いました。そして大勢の方とかかわることができて、Aさんがなじみやすそうな場所ということで「和＆輪」を紹介しました。運営されているみなさんのお人柄も素晴らしいですし、ただおしゃべりするだけのサロンではなく、輪投げなどのプログラムが用意されているので、自然に打ち解けることができるのではないかと考えました。また、Aさんの様子を見守るため、当日はケアプラザからも生活支援コーディネーターが顔を出して、ご本人のご希望なども伺うことにしました。

梅崎　ところが、Aさんは参加を前に「どんなところかわからないし、知らない人がたくさんいるところに行くのはちょっと…」と尻込みしてしまったのです。あんしんセンターの職員がチラシを渡して「楽しいところですよ」と声かけしましたが、不安は消えませんでした。そんなAさんの背中を押してくれたのは顔見知りの民生委員の存在でした。Aさんは「知っている人がいれば行けるかな」とおっしゃったので、担当の民生委員の松井さんにサロンに同行をお願いしたところ、快く引き受けてくださり、Aさんの参加が実現したのです。

尾亦　サロンは草が生い茂っている公園で開催しているので、始まる前に町内会長が機械で草刈りをしてくださいました。そして刈った草はサロンのメンバーが掃いて片づける段取りでした。私たちが公園に着くと、ベンチに腰をかけていた見知らぬ男性から「手伝いま

しょうか」と声をかけられたのです。「暇ですから」とおっしゃるのでお願いすることにしました。終わった後は「助かりました」とお礼をしてペットボトルの飲み物をお渡ししました。後からその方がＡさんだったと知ってびっくりした次第です。

山田　Ａさんは公園に着いたとき、不安になって松井さんに電話をしたそうです。松井さんが来てくれることが大きな安心材料だったのだと思いました。

尾亦　最初はぎこちない印象でしたが、会話を交わしていくうちに笑顔を見せてくれるようになりました。私自身、障害のある方とのかかわり方は難しいだろうと不安だったのですが、特別なことではなく普通にかかわればいいのだと学びました。

松井　Ａさんは、「みなさんが輪投げをしているのを見ているのが楽しかった。サロンの様子を絵に描きたい」と話していました。

梅崎　私には「地域の人と話ができて楽しかった」ということと、「草を片づけるお手伝いをしたときに『助かりました』と感謝されたことがすごくうれしかった」というお話をしてくれました。これまでのあんしんセンターのかかわりのなかでも「役に立ちたい」という思いがある方だと感じていました。

山田　ただ、「和＆輪」は高齢者が中心だったので、50代のＡさんは「同年代の参加者がいないのは寂しい」ということをケアプラザ職員におっしゃったのです。そこで、ケアプラザがいろいろ考えて対応してくださいました。

橘　ケアプラザでも高齢者に向けた活動が多いので、50代の方とつながる活動を紹介するのは難しかったのですが、Ａさんとお話したところ、絵を描くのが好きだとわかったので、ケアプラザで近々開催される作品展にＡさんの絵を出展することを提案しました。またＡさん夫妻が参加できる場として精神障害の当事者の集まりにもお誘いしましたが、日程が合わなかったので別のカフェ事業を紹介しました。いまでも、信頼関係を築きながらつながりを継続しています。

梅崎　「和＆輪」に参加し始めたのは今年の５月くらいですが、公園で開催されるので夏は暑さのために参加できず、秋から再び参加されるようになりました。当初はご主人だけの参加だったのですが、いまではご夫妻で一緒に参加するようになり、それも変化のひとつです。絵画の制作にも意欲的になって、絵画教室に通い始めることになりました。外出する機会もかなり増えたのかなと感じています。

山田　みなさんが共通しておっしゃっていたことは「特別なことはしていない」という言葉です。程よい距離感でゆるやかなつながりを続けるうちに、信頼関係を築くことができたのだと思います。

２つ目のポイントはいろいろな団体や機関がつながって、一緒に考えることができたことです。あんしんセンターがＡさんのつぶやいた「地域に知り合いがほしい」という言葉を拾ったことで、ケアプラザに相談してサロンの参加につながりました。「同年代の人がいないのは寂しい」とつぶやいた言葉を拾ったのはケアプラザで、すぐに対応してくれました。こうした何気ないつぶやきに、Ａさんの「こうしたい」という思いが隠されていたのですが、それを拾い上げて、みんなで共有することができました。Ａさん夫妻、住民、支援機関がつながっているからこそ、Ａさん夫妻が安心できる暮らし、生きがいをもてる暮らしに近づいたと考えています。

質疑応答

【Q1】

永田　松井さんは最近になって民生委員を始められたそうですね。民生委員として、どのようなことを意識して活動されていますか？

松井　見守りをさせていただいている一人ひとりの状況が異なりますので、その時々、それぞれに合わせて対応しております。

一年前に民生委員に就任しましたが、実はなったばかりのときに、Ａさんから生活上のお困りごとについて相談をいただいて、とまどいました。どうしようと悩んだのですが、そのときに就任早々の研修で学んだことを思い出しました。「そうだ、この内容ならまず区社協に相談しよう」と思い、何かあったときには、さまざまな関係機関に相談すればいいのだと思いながら活動させていただいております。

永田　権利擁護もそうですが、チームで支援することが大事ですね。一人でなんでも解決できるわけではないので、専門職や区社協、ケアプラザや地域の皆さんの力を上手に合わせながら支えていくということが大事なのだと思います。

【Q2】

永田　公園でサロン活動をされているということでしたが、サロンを立ち上げるきっかけは何だったのでしょうか。

尾亦　民生委員が地域で見守り活動を始めたころ、たくさんの方、特に一人暮らしの方から、「話をする人がいなくて寂しい」というお話を聞くことが多くありました。

　地域ケア会議でそのことを話すと、「サロンを開催するといいのでは」という声が上がりました。私もいい案だなと思いましたが、やるのは自分ではなく他の人だとばかり思っていました。「やるなら協力しよう」と思っていたら、あれよあれよという間に代表になっていました。そんな感じで立ち上げた場所です。

永田　どのようにして、代表になっていったのでしょうか。

尾亦　最初は、区社協の方がいろいろ探してくださって、「この公園がいいのではないか」などとお話をもって来てくださいました。使用するのにいろいろと調整が必要な場所でしたが、「皆さんのためを思っての場所づくりをしたい」という申し出をして、今に至っています。

永田　いろいろやっていくなかで、だんだん自分ごとになってきて、いつの間にか自分が代表になっていた、ということですね。

　こうした場があることで、住民同士をつなぐことができるのだなと思います。一昨年のこのフォーラムで、旭区の民生委員が食料支援の事例報告をされました。民生委員と農家での取組を紹介していただいたのですが、こういう活動があるから、松井さんはこの方を訪問できたわけです。過去にやってきたことがどんどんつながって、地域力が上がっていくのだなと思って聞きました。

【Q3】

永田　地域でサロンを続けていくことには、エネルギーがいると思います。尾亦さんは、いつの間にか代表になったわけですが、尾亦さんの原動力はどういうところにありますか。

尾亦　参加する皆さんが大変喜んでくださることですね。私の親くらいの年齢の方が、「こんな楽しい場所をつくってくれたから私たちなんでもお手伝いするよ」とおっしゃって、お友だちを呼びにいったり、自らお茶をサービスしてくださったり、「疲れるからあなたも座りなさいよ」と声をかけてくださったりして、和気あいあい、いい場所になっていると思います。

永田　参加者が尾亦さんを気にかけてくれるところもあるのでしょうね。

尾亦　そうですね。いろんな役割をさせていただいていますので、「忙しいんだからここでは休んでいいよ」という声をいただいています。

永田　緑区の事例でも80代の女性が、何かお願いをされることで元気になるというお話を聞きましたが、来る方も単にお客さんとして座ってるだけではなく、何かお願いされたり役割をもつというのが大事なことなんだと思います。

コーディネーターコメント comment

旭区社協のあんしんセンターが実施している事業は、全国の社協でも実施しています。判断能力に不安のある方の金銭管理や福祉サービスの利用援助をする事業ですが、実は金銭管理に留まってしまうことが多いのです。ところが旭区社協では、本人のやりたいことや、近くに相談者がいるかといったことまで気にかけながら支援していました。そしてAさん夫妻の課題をまず社協のなかで共有し、次にケアプラザや民生委員、地域の方たちにつないでいました。社協の職員同士の連携もしっかり図れていたし、ケアプラザや民生委員、地域の方たちとの連携もとれていて、素晴らしい取組だと感じました。

分科会 1

まとめ コーディネーターからのコメント

本日の実践報告をお聞きして私が感じたことをまとめます。ふたつの地区に共通していたポイントですが、まず「ひとりの困りごとから出発している」ということが挙げられます。緑区では、子育てに困っている一組の親子の支援から、こども食堂の立ち上げにつながりました。「同じような問題をかかえている人が地域のなかにいる」という視点をもって、一人の課題を地域の課題とする姿勢が大切だと改めて思いました。

もうひとつは「困っている人を、支援が必要な人とだけ捉えない」ということです。その方のできること、得意なことを見つけて生かしていました。旭区の事例では、精神障害を抱えるＡさんの趣味である絵を描くことを生かして、地域とつなげようとされていました。また緑区では、中高生にこども食堂の利用者ではなく、ボランティアとしての参加を呼びかけていました。そのようなアプローチはとても良いと感じました。

多様な機関や団体が協力して、チームワークを発揮しながら、楽しそうに活動していることも、二つの地区の共通点です。よく民生委員さんが問題を一人で抱え込んで苦しむとか、専門職が地域の方と相談しないままに自分たちたちで進めてしまうといった話を耳にしますが、さまざまな立場の方たちが、それぞれの得意分野で力を発揮しながら進めていることが素晴らしいと思います。

こども食堂の利用者であるＡちゃんの母親とスタッフのみなさんが、ママ友のような関係を築いて、さまざまなことを忌憚なく話せるようになったそうですが、孤立していた人と専門職がフラットな関係でつながったことはとても大きな成果です。居場所にはフラットなつながりをつくる機能があることを教えていただきました。旭区の事例では“ゆるいつながり”がキーワードになっていましたが、ゆるくつながることができる居場所を、地域のなかにたくさんつくっていけるといいなと感じました。

こども食堂をつくったり、精神障害の方を地域につなげたりという一つひとつの活動は、その地域に「履歴」となって残り、積み重ねられていきます。その履歴の積み重ねが「地域の力」となって発揮されるということに気づかされました。

最後に「助け上手」「助けられ上手」ということについて考えてみたいと思います。みなさんはこの一か月の間に「見知らぬ他人を助けたことがありますか？」「寄付をしましたか？」「ボランティアをしましたか？」。この３つの質問を世界114国で実施して調査したところ、イエスと答えた人の割合が日本は最下位だったそうです。日本は助け合わない国なのでしょうか？

そこで、こくみん共済コープが国内で意識調査をした結果も紹介します。知り合いが困っていたら積極的に助けるという人は65.2%でしたが、知り合いに助けを求めることができる人は36.7%でした。知り合いにでさえＳＯＳを出すことは苦手なようです。また知らない人が困っていたら積極的に助けるという人は45.7%、知らない人に助けを求めることができる人は25.8%しかいませんでした。知らない人には助けも求められないし、助けることも得意ではないようです。

私自身、電車で席を譲るときに、かえって嫌な顔をされたらどうしようといろいろ考えて躊躇してしまうタイプです。たしかに日本人は助けること、助けられることが苦手なのかもしれません。しかし、これからは「助け上手」「助けられ上手」になることが求められます。あなた自身が困っていたらＳＯＳを出してください。そして地域のなかで困っている人を見つけたら、今日、実践報告をされた2つの地区のみなさんのように、自分ができることを見つけて手を貸してあげてください。福祉は「ふだんのくらしのしあわせ」だとよく言われます。特別なことではなく、一人ひとりが少しの勇気を出して、自然体でかかわる範囲を少し広げること。そして行政や専門職がＳＯＳを受け止めて、助け上手のみなさんと協働していくこと。そんな地域共生社会をつくっていきたいと思います。

分科会

分科会2

垣根を越えて 地域に根差す まちづくり

～連携（○○×□□）で育む～

コーディネーター
渡辺　裕一
（武蔵野大学 人間科学部
社会福祉学科　教授）

この分科会のテーマは、「垣根を越えて　地域に根差す　まちづくり」です。実践報告を表面的に真似すればいいのではなく、本日のテーマである「地域に根差す」という根っこの部分で、どうやってきたのかが大事だと思います。もしかしたら、明日すぐにはできない実践かもしれませんが、５年後、10年後、20年後につながっていく第一歩として、明日からできることを掴んでいただけたら大変ありがたいと思います。

垣根を越えて連携するのは、なかなか難しいものです。私はこのお題をいただいたときに、「垣根ってなんだろう」とまず考えました。

１つ目は「対象が違う」という垣根が考えられます。「うちは子どもが対象だけど、あそこは高齢者が対象だから一緒にできない」という考えがこの垣根に当たります。

次に、「価値観が違う」という垣根もあります。地域活動には「誰もがともに暮らし続けられる地域社会をつくろう」という方向性がありますが、細かいところを見ていくと価値観の違いが出てくることがあり、「一緒にできないね」ということになってしまいます。

また、メンバーが違うと垣根が生まれます。不思議なもので、地域でサロン活動をしている団体が２つあったときに、「いいサロンにしていこう」という方向の競争心だといいのですが、利用者の取り合いなど悪い意味の競争になることがあります。他にもNPO法人なのか、地域の任意団体なのかなど、組織団体の種類の違いにも垣根が生まれやすいです。例えば、企業と地域の団体の間にはちょっと垣根がありませんか？　「ちょっとあそこの企業に声かけてくるわ」ということには、なかなかなりません。

続いて「目的の違い」です。事業内容や目的が違うと垣根が生まれやすくなります。同じ高齢者の分野であっても、「うちは配食のことだけやりますから、サロン活動は関係ありません」といった調子です。

こうした垣根を越えるためには「違うこと」を認める。つまり「違ってもいいし、違うからこそ一緒にやったらいい」という発想をもつことが大切です。

この垣根は、団体と団体の間とか、人と人との間にありそうに感じますが、実は、自分のなか、そして相手のなかにあるものかもしれません。私たちのなかにあって見えない「相手を受け入れられない」という垣根を越えていく。互いの違いをどうやって認め合って、どうやって活用し合っていくのかという発想の転換ができるかどうかです。

地域にはさまざまな問題があります。各家庭のなかや各団体のなかに入ってしまっていて、他の人からは見えなくなっている問題もあるでしょう。しかし、問題は掛け算で襲ってきます。例えば「病気になったが、多重債務で治療するためのお金がない。そして孤独で助けてくれる人もいない」「親の介護が必要だけど、子育てもしなきゃいけない。時間がなくて仕事を辞めて、大きなストレスでお酒を飲むようになり、アルコール依存になった」といった調子です。やはり地域のなかでつながっていき、誰もが他者から存在を認められ、人、組織、団体、機関、そして企業などがまちづくりを通してつながっていくことが大切です。本日はこうした垣根を越えたお話を聞くことができると思います。

実践報告 01

オール栄であたたかなつながりを
～食を通じた困りごと支援～

上郷西地区社会福祉協議会／ SELP・杜／栄区社会福祉協議会【栄区】

若尾　今回の活動のきっかけは、コロナ禍で生活に困窮される方たちが大勢いたなかで、「コロナ特例貸付」を行ったことです。令和２年度から比べると「食支援」の相談件数がかなり増えました。また、40代から50代の方の申請数が多いということがわかりました。

そこで、他区の活動を参考にしながら、フードパントリーの検討を始めました。フードパントリーとは食を配布する企画ですが、私たちとしては食を配布することによる生活の支援だけではなく、地域から孤立しないためのつながりづくりを目的としました。これを地区社協の方たちへ「共催で実施できないか」と提案してみましたが、そこで１つの壁がありました。

地区社協の方たちからは、「困っている方はいないと思う」との声や、「うちの地域に困窮世帯がいるとは言わないでほしい」という言葉が来たのです。その言葉を聞いて、なんとか地区社協の理解を深めたいと考え、塚本会長に「私たちと一緒にフードパントリーをやってくれませんか」というお声がけをしました。

塚本　正直なところ、「フードパントリーって何だろう」と感じました。それと、「食の提供なんて本当に協力してもらえるのか」とも感じ、地域で開催するに当たって、その２つの不安が非常に大きくよぎりましたが、まずは体験してみようと思いました。

実は私は当日、会場で野菜を渡す「八百屋のおじさん」として参加しました。来られた皆さんは大体40～50代の方が多く、こんな若い世代の人たちが非常に生活に困っているということを実感し、衝撃を受けました。

会場を回った参加者は、最後に八百屋のところに来ます。野菜はそのまま食べられないので、料理をしなくてはいけません。そこで、親子の会話が生まれます。「カレーの食材をもらったから、今日はおいしいカレーを作ってあげるね」と。食品を受け取るために緊張していた参加者が、和やかになる様子を見ることができました。こうした体験をして、フードパントリーは単に食を提供するのではなくて、生活を支える手段の１つとして必要であることを感じました。

塚本　忠志（上郷西地区社会福祉協議会 会長）
榎　　正晴（SELP・杜）
若尾ちづる（栄区社会福祉協議会）

若尾　区社協としては、各地区社協のなかで１年に１回でもフードパントリーができたら、栄区は７地区ありますから、２か月に１回ずつどこかで何かしらが行われるようになるのではないかと、夢を抱きながら地区社協にお願いをしました。

また、区社協は会員組織なので、会員にもお願いをしました。栄区社協は４つの部会と、11の分科会に分かれています。榎さんは専門機関部会の部会長で、障害者支援分科会の分科会長でもあります。この専門機関部会に「一緒にやっていただけませんか」とお願いしました。こちらの部会は社会福祉法人の方が多いので、社会福祉法人の公益的な取組の１つとしてフードパントリーで配布する食品の寄付をお願いしたいと問いかけました。

榎　私は本日、協力してくださった46機関の皆さんの代表で来ました。皆さんの言葉を直接お伝えしたいので、そのまま代読いたします。

ケアプラザの地域活動交流部門のコーディネーターのお話です。「このパントリーに取り組む前から、コロナ禍の影響で生活が困窮している世帯が栄区にも多

くいることは伺っていたため、何かサポートシステムが必要ではないかと私自身も考えていたところでした。受け取る方々が求めているような品物がたくさん集まるのか、人目を気にして来るのが難しいのではないかという心配もありました。しかし当日、たくさんの世帯が社協の前に並んで、家族連れも多く、心配無用でした」。

ケアプラザの生活支援コーディネーターのお話です。「生活困窮の原因がコロナ不況だと言える状況は、『私は困っています』と声をあげやすいタイミングなのではないかと感じました。困窮している方と区や区社協、ケアプラザや地域とがつながれる機会ができたと思いました」。

栄区障害者関係事業所の所長からのお話です。「若尾さんから、区社協に相談に来られた、50円しかなく食べるものもないという方のエピソードを聞いて、必要な方に誰でも協力できる趣旨だと理解しました」。

各施設の思いとして「誰でも参加でき、地域に協力ができるものであり、必要とされる方のために誰もが協力できる。こういうつながりのなかで地域愛が育まれていくのではないか。」と福祉職として心が動かされて、取り組んでいったプロセスがありました。

若尾　各施設では、住民向けに寄付を募ったり、登り旗を用意して「ここでフードドライブやっていますよ」と宣伝して、食品などを集めていただきました。そこには利用者さんのご家族や普段は施設には来られない近所の方が「どうぞ使ってください」と持ってきてくれたケースもありました。

集まった食品は、資源循環局の方が取りに行き、トラックにいっぱいになるほどの品物をケアプラザに届けてくれました。さらにどんどんつながりが広くなりました。町内会の防災備蓄品には賞味期限があるということで、缶詰300個など、かなりの多くのものをいただきました。

それから、住んでいる場所によっては会場に来づらい方たちも大勢いらっしゃいました。その方たちには民生委員や主任児童委員さんが会場に来られない世帯をまわってくださいました。

また、元地区社協の会長さんがJA横浜さんに声をかけてくださり、規格外の野菜を寄付していただきました。あとは区社協理事でもある株式会社ファンケルさんからも発芽米を大量にいただいたので、そちらも大切に皆さんにお渡しをすることができました。

栄区内の郵便局さんからも、備蓄品を私たちの方におあずけしていただいて、当日参加者に１つずつお渡ししました。

パントリーは年２回を予定しており、子どもたちが夏休みに入ってからの７月と、年末の12月です。令和５年は12月２日にフードパントリーを行いました。

当日は部屋いっぱいに主食の米やそうめんが並びました。おかずは電気やガス、水道が使えない方も食べられるように、温めなくてもいいものや缶詰などをいただきました。このようにいっぱい並んでいるなかを、１点１点きちんと地区社協の皆さんが気持ちを添えてお渡ししていきます。八百屋のおばさんがエプロンをつけて、大根の煮方を教えたり、レシピをつけてお渡しする。野菜を渡しながら「頑張って大きくなるんだよ」と言葉を添えたりしていて、本当に近所のおじちゃん、おばちゃんのようになっていたと思います。

別会場では、区の生活支援課の方や地域包括支援センターの方が今後の生活の相談にのっています。他にも「こども食堂がこの地区で木曜日にやっているからおいで」とか、「学習支援をケアプラザでやってるから来てね」などの情報を主任児童委員さんからお話していただいて、地域の方とつながりました。

ここで、参加した方からの感想もお話ししたいと思います。「皆さんの優しさが心に染みました」「久しぶりに人の温かさを感じました」「普段買ってあげられないぬいぐるみをいただいて、子どもがとっても喜んでいました」「いつかは自分が寄付できるように頑張ります」という言葉をいただき、私たちも心が温かくなり、「ああ、やってよかったな」と思いました。食材だけではなくて、地域の人から「頑張ろうね」「生きてていいんだよ」というエールが渡せたのだと思います。

榎　かかわった専門機関部会の皆さんの言葉もお伝えします。ケアプラザのコーディネーターからは、「回数を重ねるごとに、フードドライブに協力する地域の方々や企業も増えて、品々も非常に充実してきています。当日足を運べない高齢者のお宅に、民生委員さんが後からお届けする流れもできました。予約制で時間ごとの入れ替え制にするようになって、予定人数の把

握ができ、利用される方が長時間並ばなくてもよくなる体制を作ることができている感じがします」とお話いただきました。

生活支援コーディネーターの職員のお話では、「準備段階から当日までの地域や区社協の皆さんの頑張り、会場にいらした方たちの笑顔のやり取りを目にして、いろんな心配がなくなりました」。また、実施後に「年齢層や世帯、家族構成などのデータや、来場者の感想が共有されて、自分ごととして考える機会になっている。さまざまな形で孤立しない地域のつながりをつくっていきたい」と話をされていました。

栄区障害者関係の施設の所長さんは、「困っている人に直接施設が関与するのではなく、あくまで地域としてかかわるので、おのずと地域愛につながっていくのではないか」とお話されていました。

高齢者施設の施設長で、高齢分科会の会長の山田さんから伺ったお話しでは、このお話があったときに、職員に協力しようということで声をかけたそうです。「１人１個持って来てくれたら、100個ぐらい物資が集まるのではないか」と伝えたところ、思ったよりも集まり、それで第１回目のフードパントリーを迎えられたということでした。２回目３回目では、さらに利用者の家族に向けてチラシを配布して協力していただくことができました。このような取組を通じて、「いろいろな形のつながりで熱量を感じ、やるにしても否定的にならないところが栄区のよさじゃないか」と山田さんは話されていました。

孤立しないためにさまざまな形のつながりづくりがあり、食をきっかけとして相談でき、つながりが形成されるような地域づくり。地域には専門的な人がたくさんいるので、専門的なところが組み合わさりながら、パズルのピースのようによりよい支援ができることを感じました。そのきっかけを作ったのが区社協であり、若尾さんが何度も諦めずに思いをもって説明してくれたことが非常に大きかったです。

塚本　栄区には７つの地区社協がありますが、「まず上郷西地区が先陣切ってやってみよう」という強い思いをもちました。まずやってみないことには、理解が広がりませんので。

それともう１つは、私どもの上郷西地区は、栄区のなかでも最も高齢化が進んでいる地区です。高齢者のサロン活動やシニアの活動は活発なのですが、子育て世代はなかなかそういう場がなくて、苦しんでるということも知っていました。私は上郷西地区の子ども会の責任者をやっていまして、日頃から子育て世代の声を聞いていたからです。今回のフードパントリーを体験して、「上郷西地区の風土に合ったイベントはできないか」ということで取り組んだのが、「地域交流イベント上西マルシェ」です。開催してみたら、世代を超えた交流の場になりました。約280名の来場があり、私もこんなに来ていただけるとは思っていませんでした。

もう１つよかったのは、民生委員の皆さんがカレーを作ってくださり、そのカレーを食べながらみんなで楽しめたことです。これも非常に大きな力になったのではないかと思います。

上西マルシェを実施した感想として、「地域の支えが増した」「つながりがより強くなった」「気軽に相談ができた」といった声を寄せてくれました。

フードパントリーから学んだことは、地域のネットワークをいかに生かすかが大事だという点です。

若尾　フードパントリーの効果としては、オール栄で広がりができたこと、寄付の輪の広がりや、助け合いの広がりができたことだと思います。そこにフードドライブといって、一つひとつの食品を個人や団体から渡していただいたことによって、一人ひとりがかかわるきっかけ、また困窮世帯について考えるきっかけになったと思います。

今後もフードパントリーは継続をしていき、いずれは移動フードパントリーも考えられたらと思っています。

このように困窮世帯の方たちに思いを寄せてできたつながりは、決してなくなるものではありません。今後もさまざまな課題について、このネットワークを生かしてアクションを起こせることが、栄区の強みになると思います。皆さんの地区のなかにも、こういう協力者たちが大勢いらっしゃいます。どうか探してみてください。

質疑応答

【Q1】

渡辺　区社協から「社会福祉法人の公益的な取組として、フードパントリーに協力してもらえませんか」と声がかかったときに、「フードパントリーという言葉の意味が分からない」「地域の人は、困っていると知られたくないのではないか」という声が上がったそうですが、そうした壁をどのように乗り越えたのか教えてください。

榎　私たちは社会福祉事業所で働いています。生きづらさや困りごとを抱えた方を対象に、地域福祉を展開しているわけです。しかし現実には、報酬改定や厳しい職員体制などの問題がいろいろとあり、目の前の対応に追われているというのが現状です。特にコロナ禍の３～４年は、これまであったつながりが断絶していった期間でもありました。

そのような時期に、区社協からフードパントリーの必要性や具体的なエピソードを何度も説明いただいたことが、福祉の仕事をしている私たちには響きました。地域で困っている人の姿を想像し、心を向けることで、壁を乗り越えられたと感じています。

コロナ禍の前までは、福祉の理解を広めるために、高齢分科会の方が地域で開催する福祉フェスタや地区子ども会のお祭りに販売に行くなどして、それぞれの施設や住民の皆さんが地域のなかでつながっていました。今回のフードパントリーの取組というきっかけがなければ、そのつながりを再構築していくことが難しかったかもしれないと感じています。

渡辺　コロナ禍でつながりが断絶していたところに、もう一度つながりをつくっていく。これは、どうしてもコロナ禍で目の前のことでいっぱいになり、他につながっていくことができなくなっていた状態を、もう一度つなぎ直していくきっかけになったのですね。

【Q2】

渡辺　塚本さんは先ほど、「こうした取組を、地区社協としてもっと広げていこう」と言っていましたが、なぜそう思われたのでしょうか。

塚本　先ほど「上郷西地区は高齢者のまち」と言いましたが、「５年先、この地区はどうなってしまうのだろう」という危機感を非常に感じています。やはり若い世代の人がいなければ、活気のないまちになってしまいます。今はイベントを開催するときは高齢者が先頭を切ってやっていますけれど、そうではなくて、若い人たちにもぜひ「私もやってみたい」という気持ちをもってもらいたいという思いから取り組んでおります。

渡辺　「今のような活気ある地域がずっと続いていくように」と考えながら、多様な人たちにかかわってもらえる形を作っていく。こういう活動を通して地域が力を高めていくことで、さまざまな地域の課題に対しても「これだったら一緒に取り組んでいけるね」となる土台づくりにもつながってきたんだとわかりました。

コーディネーターコメント

コロナ特例貸付を分析したところ、40代50代の方が半数を超えるぐらいらっしゃった。コロナ特例貸付を通じて栄区社協として初めて見えてきたのだと思います。

また、「フードパントリーをやりましょう」と伝えたときに、「困ってる人はいないと思う」と本日のテーマである「垣根」がありました。今回この垣根を突破していったのが、熱い思いをもった若尾さんの熱心な説明でした。

素敵だなと思ったのは、困りごとを察して、困窮世帯が言わなくても助かったと思える場所を作ったという点です。フードパントリーからつながって、安心してすごせる場所「上西マルシェ」ができました。実際、フードパントリーとかこども食堂をやるときに、「あそこに行ったら困っているって知られてしまうから行きづらい」という人がたくさんいます。しかし栄区では実際にたくさんの方が参加されていたのが素晴らしかったです。

また、若尾さんは栄区の企業やJA、郵便局に声をかけました。こういうところとのつながりは、声をかける前から諦めていることが多いと思います。「社会福祉関係のことをやっている企業ではないから」とか、いろいろな決めつけが私たちのなかにあって、そこに一歩踏み出していった点が素晴らしかったと思います。

実践報告 02

子どもたちとともに育つ地域（まち）を目指して
～つながる、広がる、「はな♡そうカフェ」とともに～
寺尾第二地区社会福祉協議会／馬場地域ケアプラザ【鶴見区】

皆川　今回の実践報告のきっかけとなった活動が、

① 声かけ応援隊の“缶バッヂ”の取組

② 学んでご飯の取組

です。この取組からできた絆を生かして今回の取組が始まりました。

平成28年の地区懇談会で、“自分から積極的に挨拶する”という目標がありましたが、「知らない人に声をかけると怪しまれそう」との意見が出ました。「それなら、声かけ活動に取り組んでいる証となる缶バッヂを作っては」という一人のお母さんからの声が11月に上がり、翌年の９月には完成お披露目というスピードで実を結んだのです。

寺尾第二地区でもこども食堂に取り組むことになりましたが、「こども食堂」がこの地域に合っているのかが話題になりました。そこで平成 30年６月、地域の子どもたちを多世代で見守り、学習支援もするという、ちょっと欲張りな企画「多世代交流の場　学んでご飯」が発足しました。その取組のなかで、支援の輪が大きく広がっていきました。

まず「学んで」の要となる学習支援は、地域にある横浜市立東高等学校の生徒がボランティアとして協力してくれました。子どもたちとの距離感の取り方が素晴らしく、とても力になっています。

次に「ご飯」の部分は、地域のヘルスメイトさんが学習後の夕食作りを担当しています。栄養面も衛生面も安心してお任せできます。

また、散会後、帰りが暗くなってしまうので、子どもたちを自宅近くまで見送るボランティアは、町内会の見守り隊の皆さんが担ってくださっています。

学んでご飯が軌道にのったころ、コロナに見舞われ令和２年度は感染拡大防止のため１年間の活動休止を余儀なくされました。その空白を補い、子どもたちが現在どんなことを地域に期待しているのかを知るために、昨年10月に小中学校でアンケートを実施しました。

皆川　慈保（寺尾第二地区社会福祉協議会 副会長）
中西　　忍（寺尾第二地区社会福祉協議会 事務局長）
若林　直実（馬場地域ケアプラザ 地域活動交流コーディネーター）

その結果から、多くの子どもたちが気軽に集える居場所を求めていること、機会があれば地域の行事などに参加し、そこでボランティアをしたいという思いがあることを知りました。また一人ひとりの回答用紙から、これまで地域で開催してきた行事などの記憶が薄らいでいることが浮き彫りになりました。

そこで実施されたのが、「地域で何かできる会？」です。令和５年４月10日に、「子どもたちの声をもっと聞かせてほしい」という自治会長さんたちの熱い思いに答えてくれた馬場小学校の６年生と、上の宮中学校の２・３年生38人が集まってくれました。学んでご飯に来てくれる東高校の生徒さんや、そのOGさんたちがファシリテーターとして子どもたちの意見を聞き、まとめてくれました。

「地域で何かできる会？」は第１部で小中学生が４つのグループに分かれて地域への思いや地域への要望を話し合いました。

第２部ではアンケートにあった「地域にあったらいい場所」についての話を受けて、地域から「はな♡そうカフェ」の提案がありました。なんでもはなせる、地域が寄り添うの意味で、心をつなぐハートマークが間に入っています。奇数月の第３金曜日、ケアプラザの全室を開放してみんなが楽しく過ごし、地域のいろ

いろな方々とも交流ができます。

令和５年９月４日には、「地域で何ができる会？」で子どもたちが出してくれた要望に対して、地域でできることを検討し、それに答える会をもちました。地区社協の宮野会長の強い要望で、関係機関の多くの方々が説明をしてくれました。

「運動できる場所、外で遊べる場所がほしい」に対しては、鶴見区区制推進課まちづくり担当が、“まちのはらっぱ”の公園計画があることを話しました。

「道路が狭く車の運転が危ない」については、鶴見区地域振興課地域振興係が「せせらぎ緑道と交わる車道に注意喚起の表示をした」と回答しました。

「せせらぎの生き物の住処をなくさないで」という要望には、鶴見土木事務所下水道・公園係の回答で、定期的に手入れをしている旨のお話がありました。

第２部では、子どもたちがグループワークで自分たちができそうなことを考えました。さまざまな意見が出ましたが、それらは後日、遊水地開放時の約束事項などに生かされています。

２つの会を通しての子どもたちの感想は、「地域でやりたいことなど意見がしっかり言えて良かった」「言いたいことが言えて、大人がそれをしっかり聞いてくれてとても嬉しかった」というものでした。

これまで多世代交流会は、偶数月の第３金曜日に学んでご飯を実施していましたが、奇数月の第３金曜日にはな♡そうカフェを実施することになり、それを受け、中学校では第３金曜日の部活など中止して、地域デーにしてくださいました。

はな♡そうカフェはケアプラザの全室を使用して、多世代に渡って多くの皆さんが交流できる場です。その準備会では、自習コーナーには読書スペースもほしいとの意見があり、それを取り入れて上の宮中学校の図書委員がその都度選んでくれた本をお借りすることになりました。また、カフェで出す飲み物の種類やパンケーキのトッピングも、子どもたちの意見で決めました。カフェのテーブルクロスも、「自分たちでも縫える」という力強い声が出て、子どもたちが６枚全部縫ってくれました。

チラシも、小学生が考えてくれたものを参考にして作りました。エプロンは話し合って「みんなが使うものだからシックな色にして、可愛いワッペンをつけたらいい」ということになり、地域の方に、可愛いワッペンを作ってもらいました。パンケーキを焼く練習もしました。

では開催時の様子を、中西さんからお伝えします。

中西　１階の１部屋はゲームルームです。ここではベーゴマなどの昔遊びやゲーム、将棋などが楽しめ、地域の方がけん玉を教えてくださっています。小学生から高校生まで、最初は自信なさそうにしていましたが、だんだん上手になり、盛り上がっていきます。

１階のもう１部屋は、手芸ルームとしています。着用しなくなったTシャツを切って編み上げる布草履、ミシンを使って縫う袋物、かわいいクラフトヘアアクセサリーを作るクラフト手芸、クリスマスの置物を作成するコーナーなど、内容は多岐に渡ります。どれもボランティアの皆さんがあらかじめ材料をカットして用意してくれるなど、短時間で完成できるように工夫しています。

２階の多目的ホールでは、半分を自習ルームとしており、生徒の皆さんが自分で持ち込んだ課題に取り組みます。この部屋に、中学の図書委員の生徒さんが選定して運んでくれた本を置き、読書コーナーも設けています。初日、想定していなかった小さなお子さん連れの親子の参加があり、急遽お子さんのエリアも設置しました。その後、鶴見図書館の協力で絵本の読み聞かせのコーナーが始まりました。小さなお子さんのお母様からは、「こんなに真剣に本に向かう姿は見たことがないです。プロの読み聞かせは子どもの集中力が違いますね」と驚かれました。

多目的ホールのもう半分では、カフェルームが開かれています。中学の先生が校内放送で「今日ケアプラザに行くと美味しいパンケーキが食べられます」と流してくださったことで、中学生でにぎわいました。飲み物は、生徒さんはセルフサービス、大人には飲み物のオーダーを取って生徒さんが運んでくれます。パンケーキにはさまざまなトッピングが用意され、希望者にはオリジナルの創作パンケーキが運ばれます。

支援してくださるのは、ゲームルームでけん玉などを教えてくださる「てらお憩いの場」の皆さん。手芸ルームでは地域の方や元民生委員の方、民生委員・児童委員の有志が対応しています。自習ルームは中学校で学習支援をしている方のなかから有志で担当します。

カフェルームは、小中学生、東高校のボランティアの皆さん、民生委員・児童委員有志が担当します。自治会町内会防犯部のOBの皆さんは、はな♡そうカフェの間、周辺の見守りをしてくださいます。その他、ケアプラザの所長さんをはじめ、地域活動交流コーディネーターの若林さん、スタッフ、そして鶴見区役所の地区担当、鶴見区社協の皆さんをはじめとするあいねっと（鶴見区地域福祉保健計画）支援チームの皆さんに協力いただいています。鶴見図書館の協力もあります。こうしていろんな方たちに支えられてはな♡そうカフェは成り立っています。

若林　地区社協のこれらの一連の取組により、一番大きく変化したのは学校との連携です。先生方もケアプラザに様子を見に寄ってくださるようになり、学校と地域との距離が縮まりました。

学んでご飯では、小学校の校長先生から「食事をとれていない心配な児童を、学んでご飯に参加させたい」と相談いただき、児童に参加してもらうだけでなく、急遽、先生、民生委員、区社協、地域包括支援センター、地域活動交流コーディネーターによるミニカンファレンスが行われ、当日に食支援の訪問を行い、翌日には地域包括支援センター職員の訪問といった支援が迅速に行われた事例もあります。

学校との連携が深まったことで、児童相談所がずっとかかわっている児童や、ちょっと心配な児童を連れていきたいと小学校の先生からお申し込みがありました。また、学校に行かれない児童が、「学んでご飯になら行ける」と言って参加してくれます。学校に行かれない子は孤立しがちですが、孤立しないで地域とつながれる貴重な場になっています。また、先生から不登校児の勉強スペースについて相談を受けたり、知的障害のあるお子さんのお母さんが地域とのつながりを作りたいと、学んでご飯への参加を希望され、何度も参加していただいています。子ども家庭支援課虐待支援担当者、スクールカウンセラーなどの専門職が、「紹介したい家庭があるから見学したい」と参加することもあります。このようにいろいろな広がりやつながりが生まれ、個別支援につなげられる場だと実感しています。

先日のはな♡そうカフェにお見かけしたことがない若い男性が参加しました。外に出してあるのぼりを見て「何かやっているのかな」と入ってこられたのです。お話を伺うと、精神的な疾患により社会復帰ができていないということでした。コーヒーを飲み、パンケーキを食べ、地域の方々とお話しされ、楽しまれてお帰りになりました。ケアプラザがどのような施設かということもお伝えするいい機会になりました。

学んでご飯、はな♡そうカフェという居場所が毎月開催されることで、子どもたちが民生委員やケアプラザ職員の顔を覚えてくれるようになりました。先日学んでご飯にも、はな♡そうカフェにも毎回参加してくれているお子さんが、「道端におじいさんが倒れている」とケアプラザに来てくれて、職員が救急搬送の対応をすることができました。

皆川　これらの取組が広がり、１つ目は中学校で地域デーが実現しました。これまで部活で参加したくてもできなかった生徒さんが参加できるようになりました。

２つ目は、小学校で認知症サポーター養成講座を開催することができました。これまでもお話をもっていったことはありましたが、「小学生には無理でしょう」というお答えでした。ところが今回の取組で先生方とお会いして、お話しする機会が増えたことで、小学校の方から申し出があり、６年生の全クラスで出張講座を実施しました。皆さん真剣に取り組んでくださり、講座の最後に素晴らしい感想を書いてくれてとても感激しました。メッセージツリーにしてケアプラザや地域の郵便局に設置しています。

最後に、これまでなかなか実現しなかった遊水地の開放デーが今年度内に４回実施される予定です。これは「地域と何かできる会？」で子どもたちが話し合って決めた内容です。今後とも子どもたちの意見を積極的に取り入れ、子どもたちが成功体験を積み重ねたり、達成感を味わったりすることによって地域への関心を高め、みんなが住みよいまちにしていけるように努めていきたいと思います。

質疑応答

【Q1】

渡辺　地域でつながりの場を運営するときに、よく「対応しきれないから、こういう人は来てもらっては困る」という声がありますが、「はな♡そうカフェ」ではまったく聞こえてきません。「誰もが来られる場所」を考えられるようになったのはなぜでしょうか。

皆川　そもそも地区社協の目的が地域福祉の増進や拡充ですので、せっかく来ていただいた方を線引きしたり、排除したりという選択肢がまったくありませんでした。これまでもサロンや多世代交流の場に参加したいとご希望があった場合、お断りしたことは一度もありません。何か配慮が必要な方に対しては、「その方を含めて、参加している方々が安全に楽しく過ごしていただけるためにはどうすればいいか」を考えることから始まります。毎年私たち民生委員は、障害理解や認知症理解の講座を受講しています。民生委員が障害のある方や高齢者で困りごとを抱えている方への対応を常に学び続けているので、自信をもってお引き受けできるのであり、スタッフを信頼しているからだと思います。

【Q2】

渡辺　学校が「地域デー」という、部活がない日を作ってくれたということでした。学校とすごくいい関係ができていますし、多世代交流という言葉がいらないくらい、当たり前にそこに人が集まっているという印象を受けました。どうしてそうなれたのでしょうか。

中西　きっかけは15年ほど前です。当時の中学校の校長先生が、先駆けとなる学校支援地域本部を立ち上げて、地域の有志が学習支援や学校環境の整備のお手伝いをするようになりました。地域のなかで教員免許などの専門スキルをもつ人が、学校に入ってお手伝いをしています。私と皆川さんもその活動で、高校入試の面接シートを書くアドバイスとして、さまざまな体験や得意なことについて話を聞きながら引き出していくお手伝いをしたり、実際の面接練習などをしています。生徒さんの個人的な事情にかかわる場面もあるのですが、学校側が私たちを信頼して託してくださるのだと感じています。地域と学校はそうした信頼関係がずっと培われてきました。校長先生や生徒指導の先生が変わると学校の方針が変わることもあるのですが、このことはずっと引き継いでくださっているのが一つの大きな要因です。

また、現在の中学校の生徒指導の先生が、地区社協の宮野会長の「子どもは学校に預かってもらっているんだ。学校だけの子どもではない。子どもは地域の子どもとして我々地域が育てていく責任がある」という言葉に大変感銘を受けたと話されていました。宮野会長の地域の子どもに向ける温かさと深い思いに、学校側も応えていかなければならないと思われたことが大きかったのではないかと思います。地域の自治会町内会長さんを始めとする関係者の皆さんが地域の子どもたちを温かく見守ってくださっていることも、学校といい連携を生む一因だったと思います。

【Q3】

渡辺　鶴見区の地域福祉が発展する大きなターニングポイントの一つとして、地域にケアプラザができたことがあるように思います。先ほど「伴走していきます」という言葉もいただきましたが、ケアプラザとしてはどのようにかかわり、どのような役割を果たされたかを教えてください。

若林　馬場地域ケアプラザができる前は、寺尾第二地区は包括支援センターが３つに分かれていて、2つの地区が一緒に地域福祉保健計画を進めていました。そのことによってスピーディな取組が難しいこともあってジレンマを感じていたと伺っています。ケアプラザができたことで、地域福祉保健計画の目標の設定から具体的な取組までスピーディに進められるようになったことが、地区社協の皆さんが動きやすくなった大きな要因だと思います。

また、地区社協が推進母体として地域福祉保健計画を進めることになったのも大きいと思います。寺尾第二地区社協さんの素晴らしいところは、地域福祉保健計画を理解されていて、福祉保健のための取組だという軸がぶれない点です。ケアプラザとしては安心して、必要なことがあれば素早くフォローできるようにしています。

一方で、「これは気を付けなければいけない」と思っ

ているのは、地区社協の速さに置いていかれないようにすることです。「いつでも私たちが後ろにいます」という状態でいられるように心がけています。地区社協のお2人もよくケアプラザにいらしてくださり、お会いして直接お話を伺うことができるので、情報の共有も素早くスムーズにできていると思います。

コーディネーターコメント comment

小学校に認知症サポーター養成講座の開催をお願いしに行き、断られたことがあるとのことでした。何度もお願いに行くというアプローチもあると思いますが、別の地域活動のなかで先生方とお会いしてお話しするようになったら、向こうからお願いしに来てくれたというのは、まさに垣根を越えた瞬間だったと思います。

また、地元の中学校が地域デーを作ってくれて、部活がない日があるなど、学校と大変いい関係を築いています。この内容を他の地域の中学校の方々が知ったときに、「いいな」と思ってくれる中学校もあるかもしれないという希望をもちました。

子どもたちがお邪魔しているという感じではなくて、自分たちが考えて、話し合いに参加して、カフェも自分たちで運営している感じです。エプロンしている姿が誇らしげに見えて、「私たちのところへようこそ」という感じを受け、素晴らしいと思いました。

分科会2 まとめ コーディネーターからのコメント

2つの実践の報告にはそれぞれすごいと思うところがたくさんありました。最初に申し上げたとおり、いきなり「明日からこうなりましょう」と言いたいわけではありません。どちらの活動にもスタートがあったのだと思います。それから、活動を支える基本的な考え方があり、そういうもの一つひとつが、そこにあった垣根を越えていこうとすることにつながっていきました。

今回、テーマとして「垣根を越えて　地域に根差すまちづくり」を考えたときに、月並みな言い方かもしれませんが「つながりを作る」ということを1から始めていくことが大切だと思いました。今あるつながりはもちろん捨てずに、今までつながってこなかったつながりを作り、広げていく。

それから、つながろうとしている人たちを排除せず、どうやったら一緒にやっていけるのかを考えて、垣根を越えていくことがつながりを作っていくことになるのだと再確認しました。同じ地域で暮らしていたり、小学生も中学生も、地域で暮らしている障害のある方も、学校に通えていないお子さんも、誰もがここでつながって、ともに地域の基盤になっていく、そういうことをお話を伺いながらつよく感じました。

また、さまざまな人たちがかかわることで、持続可能性が高まると思います。1人の人が必死にやっていく形態は何かをスタートさせるときは早いですが、続きません。今、2つの実践事例でお話をいただいたように、たくさんの人たちがかかわっていくことができれば、持続していく可能性を高めることができるわけです。

あとはやはり、子どもたちの力が大事だと感じたので、学校に協力してもらう体制を作れるといいと思います。海外では教会が地域のことを一生懸命やっていて、日本ではそういう場所がないと海外の方に話をすると、「日本には学校がある。日本の学校ってすごいよね」と指摘されました。実際には今日の事例のようないい関係を作れている地域はそう多くないのが現状だと思います。しかし、何か入口となる糸口を見つけて、話し合いをしたり、お互いにできることを見つけていくことで、今日の事例のような素敵なことが起きるのだと思います。今後はそういう仕掛けをしていくことが求められていると思いました。

第８回　よこはま地域福祉フォーラム

誰もが自分らしく　暮らせるまちへ

～つながりが育む　お互い様　の支えあい～

開催要綱

私たちのまち横浜では、普段の暮らしの中で様々な見守り、支えあい活動が育まれてきました。こうした活動を広く共有することで取組の輪を広げ、困りごとを受け止め、支えあえる地域をめざしていこうという思いから始まった「よこはま地域福祉フォーラム」は、今年で８回目を迎えます。

私たちの暮らしや地域の活動に大きな影響を及ぼした新型コロナウイルス感染症の拡大は、社会的孤立による課題を浮き彫りにするとともに、改めてつながり、支えあうことの必要性を見つめなおす機会となりました。

こうした中、生きづらさを抱える一人ひとりの思いに寄り添い、困りごとや願いを受け止める取組が、少しずつ地域の中に根付き始めています。そうした取組を通じて、安心して自らの思いを打ち明けることができ、他者との関わりの中で自分らしく暮らせるまちづくりが着実に進められています。

本フォーラムを通して、取組に込められた思い、居場所を育む「つながり」や「まなざし」の大切さを共有し、誰もが安心して自分らしく暮らしていくために何ができるのか、皆さんと一緒に考えていきます。

配信期間　令和6年 **2月1日（木）～ 3月26日（火）**

内容

全体会（基調講演）

「ともに育ち　ともに生きるまなざし」

西野（にしの）　博之（ひろゆき）　氏　（認定NPO法人 フリースペースたまりば　理事長）

分科会

1．思いに寄り添う　つながりのまち
～気にかけあい　そばにいる～

2．垣根を越えて　地域に根差す　まちづくり
～連携（○○×□□）で育む～

開催方法

録画配信（ You Tube ）

※ 録画配信にお申込みをいただいた方には、後日メールにて資料ダウンロード、及び受講に必要なURL・パスワードをお送りいたします。

※視聴に関わるインターネット通信費用は、視聴される方のご負担となります。
（基調講演：1時間30分、分科会：各2時間45分程度）

【主催】横浜市社会福祉協議会　・　18区社会福祉協議会
【共催】横浜市健康福祉局・横浜市こども青少年局

（録画配信専用）

全体会(基調講演)

1時間30分

ともに育ち
ともに生きるまなざし

認定NPO法人 フリースペースたまりば　理事長　**西野（にしの）　博之（ひろゆき）　氏**

「ちゃんと普通に」「こうあるべき」そうした社会のものさしの中で、家庭や学校、地域の中に居場所を見いだせない子どもたち。
私たちは子どもたちの「今」を、どれだけありのままに受け止められているのでしょうか。

生きづらさを抱える背景にあること、子どもたちが本当に必要としていることとは何か。家庭でも学校でもない、同じ地域に暮らす住民としてどのように向き合い、関わることができるのでしょうか。

子どもたちの言葉にならない思いに寄り添い続けてきた実践を踏まえ、専門職だけではなく地域として関わることの大切さ、同じ地域に暮らす住民だからこそできること、子どもたちの居場所になるために大切なことについて、ご講演をいただきます。

【講師プロフィール】

認定NPO法人フリースペースたまりば理事長。

川崎市子ども夢パーク・フリースペースえん他、各事業総合アドバイザー。

1986年より不登校児童・生徒や高校中退した若者の居場所づくりにかかわる。
1991年、川崎市高津区にフリースペースたまりばを開設。 不登校児童・生徒やひきこもり傾向にある若者たち、さまざまな障がいのあるひとたちとともに地域で育ちあう場を続けている。
2003年7月にオープンした川崎市子ども夢パーク内に、川崎市の委託により公設民営の不登校児童・生徒の居場所「フリースペースえん」を開設、その代表を務め、2006年4月より川崎市子ども夢パークの所長に就任。2021年3月までの15年間所長を務めた。
神奈川大学非常勤講師。精神保健福祉士。

著書に『居場所のちから－生きてるだけですごいんだ－』（教育史料出版会）、
『西野流「ゆる親」のすすめ<上>7歳までのお守りBOOK～「正しい母さん・父さん」を頑張らない。～』
『「ゆる親」のすすめ<下>10歳からの見守りBOOK～だいじょうぶのタネをまこう。～』
（ジャパンマシニスト社）等多数。

分科会(実践報告)

1 思いに寄り添う　つながりのまち　2時間45分
～気にかけあい　そばにいる～

一人ひとりの困りごとを地域と専門職がともに受け止め、身近な地域で支えあう取組が育まれています。「生きづらさ」を抱える人が孤立することなく、安心して自分らしく暮らしてくために、寄り添い、支えあえる地域づくりの必要性を考えます。

コーディネーター：同志社大学　社会学部社会福祉学科　教授　永田　祐　氏

実践報告　：● 鴨居こども食堂ぱくぱく / 鴨居地区社会福祉協議会 / 鴨居地区民生委員児童委員協議会 / 鴨居地域ケアプラザ / 緑区社会福祉協議会　（緑　区）
● 市沢地区民生委員児童委員協議会 / 和＆輪 / 左近山地域ケアプラザ / 旭区社会福祉協議会　（旭　区）

鴨居こども食堂ぱくぱく
鴨居地区社会福祉協議会
鴨居地区民生委員児童委員協議会
鴨居地域ケアプラザ･緑区社会福祉協議会

こどもや家族のための居心地のよい場づくり

～食堂での交流を通じた地域での見守り～

あるひとり親家庭から「週に1度、保育園へのお迎えと一時預かりをして欲しい」とのSOSが入り、支援機関と地域とで検討を重ねた。こどもの預かりを兼ねて始まったこども食堂は、参加者と地域の人々との交流をしながら、一人ひとりの個性や家庭の状況を、受け止め支えていく場として発展していった。そこから見えてきた地域活動の意義に迫る。

市沢地区民生委員児童委員協議会
和＆輪
左近山地域ケアプラザ
旭区社会福祉協議会

誰もが生きがいを持って暮らせる地域を目指して

～孤立を防ぐゆるやかなつながりづくり～

転居してきた精神障害のある夫妻。「地域とつながりたい」という思いを聞き、住民や支援機関の橋渡しによってサロン等へ参加。その後、つながりが増えていく中で少しずつ準備を手伝う等、地域の中で役割を持って活動に参加するようになっていく。孤立しがちな住民が地域の中でつながりを持ちながら生活をすることや、居場所の意義について考える。

2 垣根を越えて 地域に根差す　まちづくり　2時間45分
～連携（○○×□□）で育む～

住民、教育機関、福祉施設、企業など地域にある様々な主体がつながることで、まちづくりの新たな可能性が広がります。それぞれの強みを生かした連携のポイントについて、実践事例を通じて共有します。

コーディネーター：武蔵野大学　人間科学部社会福祉学科　教授　渡辺 裕一　氏

実践報告　：● 上郷西地区社会福祉協議会 / SELP･杜 / 栄区社会福祉協議会　（栄　区）
● 寺尾第二地区社会福祉協議会 / 馬場地域ケアプラザ　（鶴見区）

上郷西地区社会福祉協議会
SELP･杜
栄区社会福祉協議会

オール栄であたたかなつながりを

～食を通じた困りごと支援～

コロナ禍で見えてきた生活困窮世帯。その支援のため、区社協は地域に呼びかけ、協力して食品を渡す取組を実施し、見守りや支えあいにつなげる。

食の支援は、住民や企業の寄付協力、食品寄付の受取に協力する施設など、区全体に広がりを見せていく。つながりによる支援を発展させてきたポイントを探る。

寺尾第二地区社会福祉協議会
馬場地域ケアプラザ

子どもたちとともに育つ地域（まち）を目指して

～つながる、広がる、「はな♡そうカフェ」とともに～

「地域の声を大切に、即動く」をモットーに取り組む地区社協。子どもたちから地域に求める声を聴く過程で、多様なつながりや連携が育まれ、子どもたちの目線に合わせた活動が広がっていく。

目指すのは、子どもたちが求める地域（まち）の実現。その先にどんな未来が描かれていくのか。

お申込み

配信期間

令和6年2月1日（木）～3月26日（火） 録画配信

※配信期間終了の前日、3月25日（月）までにお申込みください。

録画配信 申込フォーム

下記URL、または右の二次元コードからお申込みください。
後日メールにて受講、および資料ダウンロードに必要な
URL・パスワードをお送りいたします。

URL：**https://x.gd/chifuku8rokuga**

申し込みはこちら

※お申込みいただきますと、受付完了メールを自動返信させていただきます。
メールが届かない場合は、ご入力いただいたアドレスに誤りがある可能性があ りますので、お手数ですが、下記事務所までご連絡をお願いいたします。

主 催　横浜市社会福祉協議会　18区社会福祉協議会
共 催　横浜市健康福祉局　横浜市こども青少年局
協 力　神奈川県社会福祉協議会　川崎市社会福祉協議会　相模原市社会福祉協議会
関東学院大学　神奈川大学　鶴見大学　横浜市立大学
公益財団法人 横浜YMCA　認定NPO法人 横浜移動サービス協議会
公益社団法人 神奈川県介護福祉士会　公益社団法人 神奈川県社会福祉士会
公益財団法人 神奈川新聞厚生文化事業団　公益財団法人 横浜市男女共同参画推進協会
一般社団法人 神奈川県介護支援専門員協会　横浜市市民協働推進センター
一般社団法人 ラシク045
（順不同）

※ 文中は敬称略としています

〈個人情報の取扱いについて〉
参加申込書に記載された個人情報は、本フォーラムに係る企画、主催者用参加者名簿の作成・管理等、本フォーラム関連のみの目的で使用するとともに、本会「個人情報保護に関する方針」に基づき、適切に取り扱います。
（個人情報保護に関する方針 →https://www.yokohamashakyo.jp/kojin-joho/）

問合せ お申込み

横浜市社会福祉協議会 企画部 企画課
TEL 045－201－2090　FAX 045－201－8385
E-mail chiikifukushi-f@yokohamashakyo.jp
https://www.yokohamashakyo.jp
〒231-8482 横浜市中区桜木町1－1
横浜市健康福祉総合センター7階

※「よこはま地域福祉フォーラム」は一部共同募金の配分金で実施しています。
※ プログラム中の各表題、登壇者等は変更になる場合があります。ご了承ください。

■主催

横浜市社会福祉協議会

鶴見区社会福祉協議会・神奈川区社会福祉協議会・西区社会福祉協議会
中区社会福祉協議会・南区社会福祉協議会・港南区社会福祉協議会
保土ケ谷区社会福祉協議会・旭区社会福祉協議会・磯子区社会福祉協議会
金沢区社会福祉協議会・港北区社会福祉協議会・緑区社会福祉協議会
青葉区社会福祉協議会・都筑区社会福祉協議会・戸塚区社会福祉協議会
栄区社会福祉協議会・泉区社会福祉協議会・瀬谷区社会福祉協議会

■共催

横浜市健康福祉局
横浜市こども青少年局

■協力（順不同）

社会福祉法人　神奈川県社会福祉協議会
社会福祉法人　川崎市社会福祉協議会
社会福祉法人　相模原市社会福祉協議会
関東学院大学
神奈川大学
鶴見大学
横浜市立大学
公益財団法人　横浜YMCA
認定NPO法人　横浜移動サービス協議会
公益社団法人　神奈川県介護福祉士会
公益社団法人　神奈川県社会福祉士会
公益社団法人　神奈川新聞厚生文化事業団
公益社団法人　横浜市男女共同参画推進協会
一般社団法人　神奈川県介護支援専門員協会
横浜市市民協働推進センター
一般社団法人　ラシク045

第8回

よこはま 地域福祉フォーラム

誰もが自分らしく暮らせるまちへ

～つながりが育む お互い様 の支えあい～

配信期間 令和６年 **2月1日㊍～3月26日㊋** (3月25日締切)

【後日録画配信】YouTubeによる動画配信

申込
※URL： https://x.gd/chifuku8rokuga
または右の二次元コードよりお申込みください。
※お申込みいただいた方には、後日メールにて、視聴用URLをお送りします。

申し込みは こちら！

全体会 基調講演

ともに育ち ともに生きるまなざし

講師

西野 博之氏
認定NPO法人
フリースペースたまりば
理事長

- 川崎市子ども夢パーク
  フリースペースえん
  川崎若者就労生活自立支援センター
  「ブリュッケ」総合アドバイザー
- 神奈川大学非常勤講師
- 精神保健福祉士

分科会 実践報告

1）思いに寄り添う つながりのまち ～気にかけあい そばにいる～

コーディネーター） 永田 祐 氏 (同志社大学 社会学部 教授)

・こどもや家族のための居場所のよい場づくり **（緑区）**
～食堂での交流を通じた地域での見守り～

・誰もが生きがいを持って暮らせる地域を目指して **（旭区）**
～孤立を防ぐゆるやかなつながりづくり～

○○×□□

2）垣根を越えて 地域に根差す まちづくり ～連携で育む～

コーディネーター) 渡辺 裕一 氏 (武蔵野大学人間科学部教授)

・オール栄であたたかなつながりを **（栄区）**
～食を通じた困りごと支援～

・子どもたちとともに育つ地域（まち）を目指して **（鶴見区）**
～つながる、広がる、「はな♡そうカフェ」とともに～

主催： 横浜市社会福祉協議会・18区社会福祉協議会
共催： 横浜市健康福祉局・横浜市こども青少年局

申込み問合せ
横浜市社会福祉協議会 企画部 企画課
TEL 045-201-2090
FAX 045-201-8385

第８回　よこはま地域福祉フォーラム
誰もが自分らしく暮らせるまちへ　～つながりが育む　お互い様の支えあい～

発行日　2024年３月
発　行　社会福祉法人 横浜市社会福祉協議会
〒231-8482　神奈川県横浜市中区桜木町1-1 横浜市健康福祉総合センター
TEL：045-201-2090／ FAX：045-201-8385

編集協力　特定非営利活動法人　全国コミュニティライフサポートセンター
制　　作　七七舎

「よこはま地域福祉フォーラム」は共同募金の配分金を財源の一部としています

じぶんの町を良くするしくみ。
赤い羽根共同募金